

No.89

東 海 体 育 学 会 会 報

TOKAI SOCIETY OF PHYSICAL EDUCATION 2016

【東海体育学会】

【content】

巻頭言	不安の多い社会に対して 鶴原清志(三重大学)
研究情報	スポーツバイオメカニクス研究の知見を応用したコーチングの実践報告 田内健二(中京大学) コンドロイチン硫酸は運動時の過度な血圧応答を抑制する可能性がある? 堀田典生(中部大学) エビデンスが示す学校管理下の重大事故 内田 良(名古屋大学)
大学情報	愛知大学 地域政策学部 健康・スポーツコース 湯川治敏(愛知大学) 南山大学における体育教育の取り組み 金 興烈(南山大学)
委員会報告	企画委員会活動報告 春日晃章(岐阜大学) 編集委員会活動報告 重松良祐(三重大学) 広報委員会活動報告 西田 保(愛知学院大学)
学会大会	第63回東海体育学会大会報告 池上久子(南山大学) 東海体育学会63回大会を終えて 湯 海鵬(愛知県立大学) 東海体育学会第63回大会見聞録 池上久子(南山大学) 東海体育学会第64回大会のご案内 野村良和(名古屋学院大学) 東海体育学会第64回大会演題募集要項 野村良和(名古屋学院大学)
お知らせ	庶務委員会からのお知らせ 富岡 徹(名城大学)、鍋谷 照(静岡英和学院大学)、 早川健太郎(名古屋経営短期大学)
理事会報告	東海体育学会理事会議事録
総会報告	平成27年度東海体育学会総会議事録
会則	東海体育学会会則

不安の多い社会に対して

東海体育学会会長 鶴原 清志(三重大学)

今期から会長を務めることとなりました。理事長に引き続いての会長ということですが、前会長の藤井先生のような有能な会長の後ということで、会長職を無事に果たすことができるかどうか不安な面もありますが、よろしくお願い致します。

さて、現在の世界を見ますと、過激派組織IS(イスラミックステート)の活動により、世界中、特に中東やヨーロッパがテロの脅威にさらされて、難民への対応が大変な状況にあります。また、ナイジェリアでもボコハラムの活動により、やはりテロの脅威があります。世界に暴力の脅威が広がっていくことに恐ろしさを感じるとともに、いずれは日本でも起こるのではないかと不安が広がります。

また、南沙諸島においては、中国の強引な活動が実施されており、力による現状の変化が危惧されています。いずれは尖閣の領域においても実施されるのではないかと、こちらも不安が広がります。

さらには、パナマ文書の流出によって、タックスヘブンにある企業を使って、多くの資産家が税金を回避していることが明らかになりつつあります。世界において、また日本においても経済格差の問題が指摘されている状況で、不公平感が広がっていくことに不安を覚えます。

そして、今年はリオデジャネイロでオリンピックが開催されますが、世界の祭典であるオリンピックを開催する都市や国が今一つ盛り上がりず、競技場の建設や公共設備の整備の遅れが心配されていますし、オリンピックが目の前に迫っているにもかかわらず、大統領の辞任を求める活動が活発になりつつあります。さらには、治安やジカ熱、水質汚染の心配もあり、開催に際して不安があります。

さて、大学の状況に目を向けて見ますと、子供の数が減少していくことは、いずれは大学生の数も減少していくことになります。それに対してこの10年、大学の数は増えており、現状では、定員割れする大学が約40%になっています。現在では、私立大学から公立大学へ移行する

ことによって、定員割れ防ぐようにしている大学が出てきています。

また、東海体育学会に関しては、体育学会での支部会費について検討されており、その見通しは、現状の様には維持できない方向であり、今後、対応が迫られる状況です。

紙面の半分以上を割いて、不安の広がる暗い話ばかりを書きましたが、正しい現状認識の基、今後について考えていくことが必要と思われます。

日本が平和で自由な、そして平等な国であることが、学問、教育、スポーツを推進していく前提となっていると思います。この状況を続けていくために、体育関係者として、どのような活動をしていくかを見つめ直していくことも必要かと思います。もちろん、学会である限り、研究活動が最も重要なことであり、その研究活動をどのように活性化していくことができるかにエネルギーを注がなくてはなりません。ただ、研究活動も重要ですが、会員相互で様々な話ができる学会となることができれば、新たな学会の意義が見出せるのではないかと思います。東海地区という限られた地域で、会員の皆様が相互に知り合い、様々なことについて意見交換ができるように、これから意識して努力していきたいと思っています。

さて、今年の東海体育学会は、64回大会となり、10月30日(日)に名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎で開催されます。現在、シンポジウムのテーマを「運動・スポーツ活動を通じたこどもの育み、一地域・研究機関・学校等による協同的取り組みからの検証」として、準備が進められております。多くの会員の皆様に学会大会への参加と研究発表をお願い致します。学会大会の活性化が東海体育学会の活性化へとつながるものと思います。また、学会の活動を通して、東海地区の会員相互のコミュニケーションが活発になり、よりよい学会へと発展していくことが期待できます。よろしくお願い致します。

スポーツバイオメカニクス研究の知見を応用したコーチングの実践報告

田内 健二(中京大学)

スポーツ科学の知見を競技現場に応用し、競技力向上に貢献することは、スポーツ科学の重要な役割の1つである。著者は、スポーツバイオメカニクスの研究者として、また陸上競技の投てき種目(砲丸投げ、円盤投げ、ハンマー投げ、やり投げ)のコーチとして活動している。したがって、自らの研究で得た知見をコーチング現場で活用することを、ごく自然な形で実践していることとなっている。著者は、幸いなことに、ディーン元気というやり投げ選手にめぐり合い、2012年のロンドンオリンピックに参加することができた。このディーン選手がオリンピック出場を果たすに至ったコーチングの過程においても、著者の研究活動を通して得た知見が、不可欠であったと振り返ることができる。

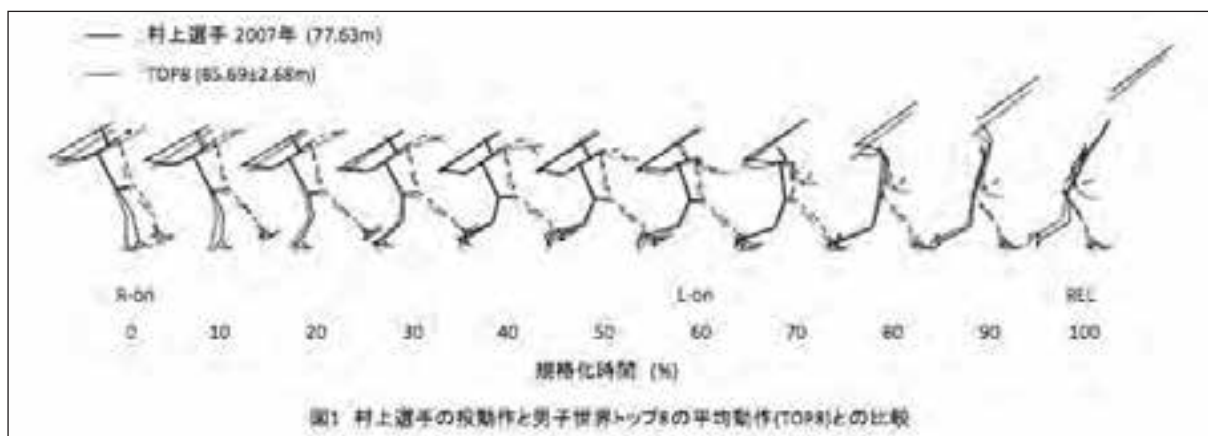
そこで本稿では、ディーン選手のオリンピック出場を果たすにあたり、どのような研究活動の成果がコーチングで活かされたのかについて紹介し、古くからの課題である「研究と実践とのギャップを埋める」ことのスポーツ科学分野における課題を検討したい。

1. 村上幸史選手(09年世界選手権やり投げ銅メダリスト)とのデータを介した議論

ディーン選手へのコーチングを語る上で欠くことのできないのは、村上幸史選手とのやりとりである。村上選手は、日本選手権12連覇(2000年-2011年)を果たしている日本のやり投げの第一人者である。彼は、2008年の北京オリンピックに出場後、それまでのコーチと2人3脚で行ってきたトレーニングに加えて、自ら科学的側面からの情報を積極的に得ようと考えたようである。言葉通り、2008年

のシーズンオフ以降、村上選手と著者は投てき動作について、データを介した議論を繰り返し行うようになった(陸上競技マガジン、2010年3月号、pp.100-106)。本稿では、その一部を紹介したい。

図1は、2007年世界選手権男子やり投げ上位8名の平均動作モデル(TOP8: 85.69±2.68m)と同大会で21位に終わった村上選手の投てき動作(77.63m)を比較したものである(2007年世界選手権は、大阪で開催されたことから、日本陸上競技連盟の科学委員会が中心となってバイオメカニクス研究プロジェクトを立ち上げ、著者がそのメンバーであったことから、世界トップレベル選手の動作を分析することができた)。なお、平均動作モデルとは、各分析対象者の座標値を平均し、モデル化したものである¹⁾。その結果、村上選手はTOP8と比較して、投げの最終局面(L-on後、70%-90%の右上肢)において、腕を振り、やりを前方に引き出すタイミングが早い、言い換えれば“腕のしなり”が小さいことが明らかとなった。この“腕のしなり”が小さいということは、肩関節周りの筋群における伸張-短縮サイクルによるパワーを爆発的に発揮できないことにつながり、やりの飛距離を生み出す動作としては大きな欠点であると解釈できた。この動作の原因や改善策について、村上選手と議論し、結果として、その翌年(2009年)に世界選手権で銅メダルを獲得することとなった。ここでの議論⁵⁾、および村上選手に対するその他のデータを介した議論の詳細については、これまでいくつかの論文において報告しているので、そちらを参照されたい^{2), 4), 6)}。なお、銅メダルを獲得して以降の村上選手の投てき動作を分析した結果、自己最高記録



(85.96m)の投てき動作では、“腕のしなり”がより大きくなっていたことが確認されている³⁾。

以上のような村上選手とのデータを介した議論を通して、筆者は世界トップレベルの選手がどのような投てき動作を行っているのかを客観的に把握することができ、彼らはより大きなエネルギーをやりとりに与えるという観点からすれば、実に合理的な動作を行っているという結論を得ることとなった。

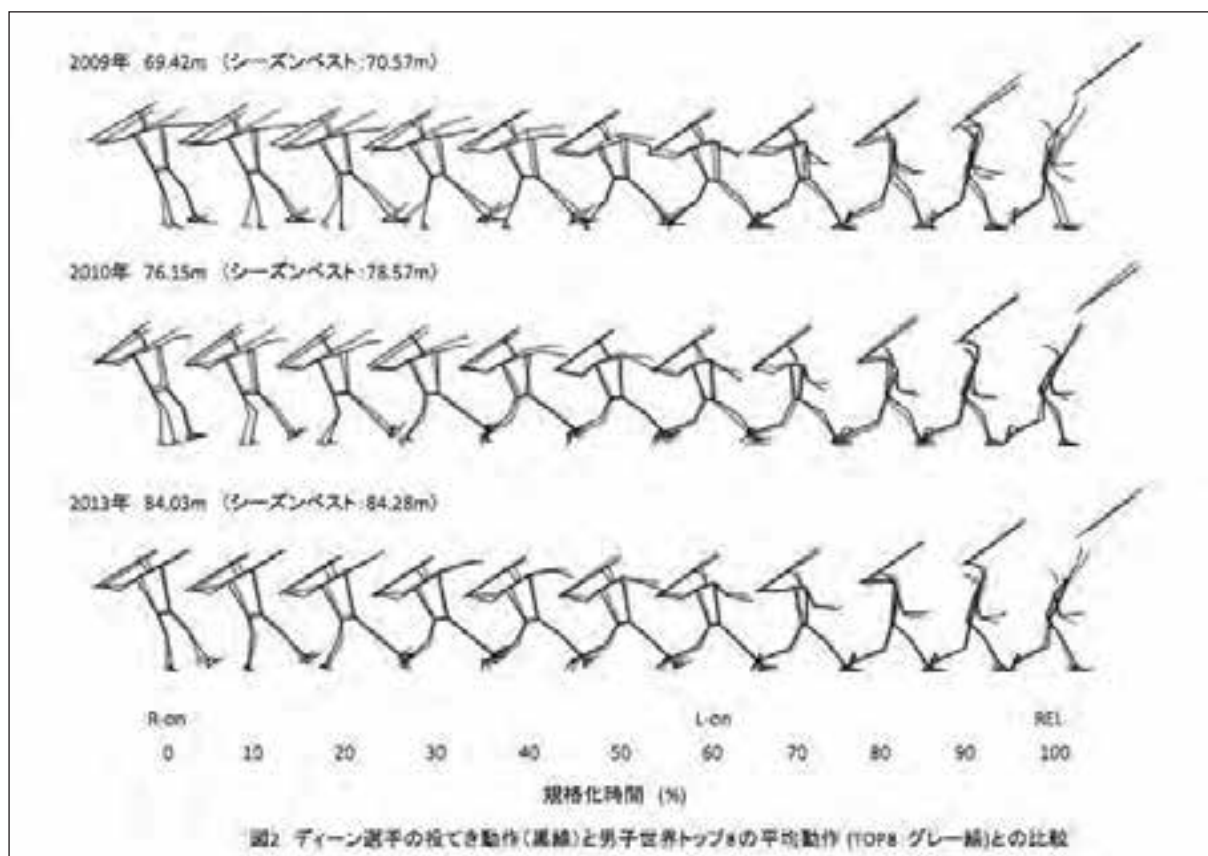
2. ディーン元氣選手へのコーチングの実践

ディーン選手と初めて出会ったのは、彼が高校2年次、2008年の3月に行われた高校生を対象とした陸上競技の合宿で著者がコーチとして参加したときであり、ちょうど上述した村上選手とのやりとりを行っていた時期でもあった。その合宿がきっかけとなり、著者はディーン選手が大学に入学して以降、現在も専任コーチとして活動している。

ディーン選手は、2009年(高校3年次)にインターハイ、国体においてやり投げで優勝していたが、歴代の優勝者と比較して、その記録は決して突出したものではなかった。その大きな要因の1つは、投てき動作が未熟であったことがあげられる。図2に、ディーン選手の高校3年次(2009年)、世界ジュニア選手権で銀メダルを獲得し

た大学1年次(2010年)、ロンドンオリンピック出場を決めた大学3年次(2012年)の投てき動作と先に示したTOP8とを比較したものを示した。2009年の投げをみると、図1の村上選手の場合と比較してもTOP8と大きく異なる動作であったことがわかる(図2上段)。特に、下半身の動作におけるずれが大きいこと、その一方において、最終局面における“腕のしなり”は、TOP8よりもしなっていることが観察できる。つまり、2009年のディーン選手投げは、下半身の動作が未熟であるが、“腕のしなり”については、世界トップレベルに勝るような動作であったという評価ができる。なお、この評価については、ここに示したデータで初めて理解したというよりは、実際に見た主観的な評価を、後日データによって確認したというのが正しい解釈である。このようなことから、著者はディーン選手に対して「下半身の動作の改善」を常に指導し、村上選手の課題とされた“腕のしなり”については一切指導したことはない。

下半身の動作の改善についての具体的な内容は、ここでは紹介しないが、著者は前述したTOP8の動作に近づける方向で課題を与え、ディーン選手は非常に短期間でその動きと意味を理解し、動作の改善を行うことができた。その結果、2010年7月には自己記録を6m以上更新し、世界ジュニア選手権で銀メダルを獲得した。さらに、



その後11月に78.57mを投げジュニア日本記録を更新した。2010年の76mを投げた投てき動作を分析すると、TOP8の動作と重なる部分が増えていることが観察できる(図2中段)。さらに、ロンドンオリンピックの開催年である2012年では、84.24mという世界トップレベルの域まで達し、その際の動作を分析すると、TOP8の動作とほぼ重なっており(図2下段)、投てき動作の観点からも世界トップレベルの選手となったことが確認できる⁸⁾。

以上のように、著者は世界トップレベルの投てき動作をバイオメカニクスの観点から分析し、その合理性を理解していたことから、ディーン選手に対して、TOP8の平均動作モデルに近づける方向で課題を提示してきた。その結果が、図2に示した動作につながり、記録も大きく向上したものと考えている。

3.「研究と実践とのギャップを埋める」ことの課題

競技スポーツを研究対象とする研究者(以下、単に研究者)において「研究とスポーツ現場(実践)とのギャップを埋める」ことは、古くから特に重要な課題の1つであり、未だ解決し切れていない難題でもある。

現在の高度化、専門化する競技スポーツ界において、競技力向上を果たすためには、スポーツ科学の知見が必要不可欠であるという意見は皆が肯定するところであろう。したがって、「研究とスポーツ現場(実践)とのギャップを埋める」ためには、研究者とスポーツの実践者(競技者およびコーチ)、両者の相互理解と協力が必要であることは容易に理解できよう。しかし、著者の知る限りでは、実際にこの関係性が構築されているスポーツ現場は、少ないのが現状であると考えられる。この原因の1つには、やはり現場の選手やコーチが科学的データの利用価値を十分に認識していないことにあり、著者は考えている(もちろん、研究者におけるスポーツ現場の理解を深めることもこれまで以上に必要であるが)。この問題を解決するためには、科学的データに精通し、それを競技現場の実際と関係づけながら解釈する能力を備えた選手やコーチを育成することが不可欠である。しかし、世界トップレベルに近い競技現場であればあるほど、改めて理論やデータの解釈を学習する機会をもつことは極めて困難なことであると考えられる。一方、体育系大学といわれる専門教育機関を考えると、そもそも選手やコーチ(の卵)に科学的データの意義を教育することが重要な役割の1つである。スポーツ現場の現状は、この役割が

十分に果たせていないことを暗に示していると考えられる。したがって、著者自らもその立場であることを十分に認識し、大学におけるスポーツ科学の教育内容および環境をより充実させ、科学的データに精通する選手、コーチを育てることが、「研究とスポーツ現場(実践)とのギャップを埋める」という課題を解決する答えに直結するものと考えている。なお、ここに記述した内容は、田内(2011b)⁷⁾の内容を一部抜粋、改変したものである。

参考文献

- 1) Ae, M., Muraki, Y., Koyama, H. and Fujii, N. (2007) Bull. Inst. Health and Sport Sci., Univ. of Tsukuba 30: 5-12.
- 2) 村上幸史, 田内健二, 遠藤俊典, 村上雅俊, 本道慎吾, 畑瀬聡(2009) 陸上競技学会誌7 :18-26.
- 3) 村上幸史, 塚田卓巳, 遠藤俊典, 田内健二(2014) 陸上競技研究98: 36-43.
- 4) 田内健二, 村上幸史(2008) バイオメカニクス研究12(2):143-152.
- 5) 田内健二, 村上幸史, 藤田善也, 磯繁雄(2009) スポーツパフォーマンス研究1:151-161.
- 6) 田内健二(2011a) バイオメカニクス研究15(3): 101-107.
- 7) 田内健二(2011b) 中京大学論叢52(2):31-41.
- 8) 田内健二(2014) バイオメカニクス研究18(2):94-100.

コンドロイチン硫酸は運動時の過度な血圧応答を抑制する可能性がある？

生命健康科学部 堀田 典生(中部大学)

アメリカスポーツ医学会は、健康の維持増進のために、週3-5日の有酸素運動と週2-3回レジスタンス運動を推奨している(Garber et al., Med Sci Sports Exerc, 2011).日本においてもロコモティブシンドロームの予防のためにレジスタンス運動が勧められている.そして、筋肥大や筋力増強にはおよそ最大挙上重量の60%程度の負荷を用いることが推奨されているため(ACSM, Med Sci Sports Exerc, 2009),レジスタンス運動時にはかなりの血圧上昇を免れることは難しいと考えられる.高血圧症に罹患していることの多い高齢者を対象とする場合にこれは問題となり得る.したがって、運動中の過度な昇圧応答を抑えるような方法や薬剤の探索はスポーツの分野では重要だと思われる.ここでは、運動時の過度な血圧上昇を抑える可能性を、私が指導を受けている中部大学水村和枝研究室の研究成果を軸として情報提供したい.

運動時には活動筋への酸素供給のために、心拍や血圧などの循環応答は反射性に増強される.その反射の調整の機序は、中枢神経系の運動領域からの指令による調節であるセントラルコマンド(Paterson, J Physiol, 2014)と活動筋からの反射で説明される.後者については、活動筋の収縮などの機械的な情報や、運動によって生じる化学物質やpHの低下などの代謝情報を、“筋細径求心神経”が受容し、中枢へ信号を送ることで、反射的に循環応答を促進させると考えられている(Kaufman, Exp Physiol, 2012).

運動中の活動筋におけるpH低下はよく知られており、水素イオン(H⁺)は筋細径求心神経を刺激すると考えられていた.しかし、H⁺に反応する線維は2割に満たず(Taguchi et al., J Neurophysiol, 2005),H⁺に対する反応性という点では、筋細径求心神経は昇圧反射を起こす求心神経としての役割を満たせないことが判明した.そこで、皮膚細径求心神経線維は、酸により機械刺激に対して過敏になるという先行研究(Steen et al., J Neurosci, 1992)を参考に、H⁺は筋細径求心神経線維を興奮させないが、機械刺激に対する応答性を増加させるとの予想の下、ラットの取り出し神経筋標本を用いた単一神経活動記録(図1)を行った.そして、運動時に活

動筋で生じているような酸性環境下では、筋細径求心神経の機械刺激に対する応答性が増強することが分かった(Hotta et al., Neurosci Res, 2015).この結果は、運動中のアシドーシス環境下(おそらく活動筋の代謝要求が大きい状況)では、活動筋からの筋細径求心神経を

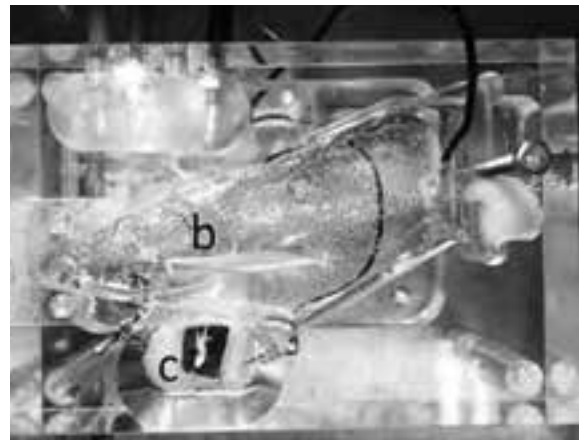
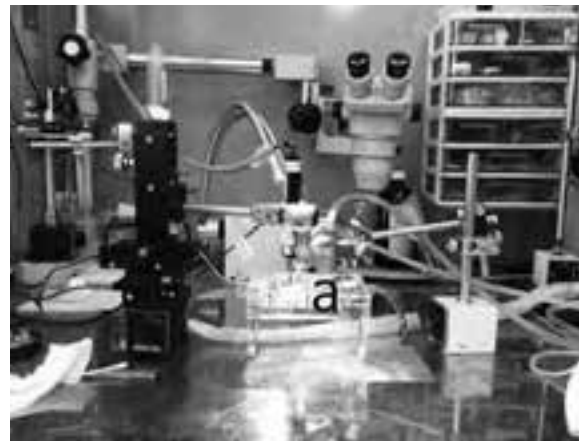


図1 ラットの取り出し神経筋標本を用いた単一神経活動記録の様子.
写真上:全体像.
写真下:チャンバーの様子(aを拡大).b:長指伸筋.c:腓骨神経.
ここで単一神経記録を行う.

介した上行性信号が増え、循環応答のさらなる亢進に貢献することを上手に説明し得る.

一方、一次求心神経の細胞体(培養脊髄後根神経節細胞)を用いた研究(Kubo et al., J Physiol, 2012)により、酸による機械反応増強作用は、植物レクチンのIso-lectinB4(IB4)によって標識される細胞(IB4+細胞)で生じ、動物体内にムコ多糖として存在し、関節痛に対して広く使われる“コンドロイチン硫酸”やコンドロイチナーゼで細胞を処理した場合、酸による機械反応増強作用

が抑制されることが明らかにされた。IB4+細胞は細胞膜上にversicanという糖タンパク質を持ち、versicanは、糖鎖としてコンドロイチン硫酸しか持たない性質がある(Wu et al., Cell Res, 2005)。これより、versicanの糖鎖領域に存在するコンドロイチン硫酸は、酸性環境下において荷電が変わることにより形状が変化し、機械受容チャネルに何らかの影響を及ぼすことが予想された。

この培養脊髄後根神経節細胞を用いた研究の弱点は、神経細胞体で生じた現象が、そのまま軸索末端にて同じように生じるかは分からないということと、その細胞は、筋だけでなく、皮膚や骨など、どこに由来する神経細胞なのか不明であることであった。

そこで、ラット単一神経記録法(図1)を用いて、筋細径求心神経線維において、酸による機械反応増強作用がコンドロイチン硫酸により抑制されるか明らかにしようとした。

筋細径求心神経では、versicanが7割以上発現しているため(Hendrich et al., Neuroscience, 2012)、コンドロイチン硫酸処理により筋細径求心神経線維の酸による機械反応増強作用は抑制されると予想された。そして、筋細径求心神経レベルにおいても、酸による機械反応増強作用はコンドロイチン硫酸によって抑制されることが分かった(Hotta et al., 投稿準備中)。

ここで問題となるのが、我々が観てきた筋細径求心神経が、本当に運動昇圧応答に関わる神経なのか、侵害受容性神経であるか分からないことであった。しかし、最近発表された論文によれば、少なくとも虚血(虚血を模擬した状態、酸性環境下に似ていると考えられる)に反応する侵害受容性神経と運動昇圧応答に関係する神経は同一であることが示されている(Queme et al., J Neurosci, 2016)。

今私達は、動物のin vitroの系で確認できたことを、ヒトを対象とした実験により、コンドロイチン硫酸経口摂取がレジスタンス運動中の昇圧応答を抑制するか検討している(図2)。

中部大学生命健康科学研究科大学院生募集

私の研究室では、ヒトや動物を対象として運動生理学の実験を行っています。また、得られたデータを還元する場として運動教室も開いております。現在は大学院生がいないので、大学院に入学して来ていただければ手厚い指導ができます。



図2 コンドロイチン硫酸摂取後にレッグプレス中の血圧を測定している様子。

また、中部大学では“中部大学教育後継者育成事業”という制度があり、大学院修士課程から博士課程に進み、そのまま中部大学の教員として採用されることを目指すことができます。授業料相当額を奨学金として受け、博士課程を修了すれば返済免除になります。

また何よりも、つい先日だされたNature Index Japanによれば(Phillips, Nature, 2016)、中部大学は科学に優れた日本の私立大学では6位に、東海圏私立大学では1位となっており、とても“研究を頑張れる大学”となっています。一緒に研究をやりませんか?以下に研究室の様子(図3)を示しておきます。



図3 研究室で実施しているヒトを対称とした実験の様子。

本稿にて紹介した研究の一部はJSPS科研費23700788の助成を受けたものです。

エビデンスが示す学校管理下の重大事故

内田 良(名古屋大学)

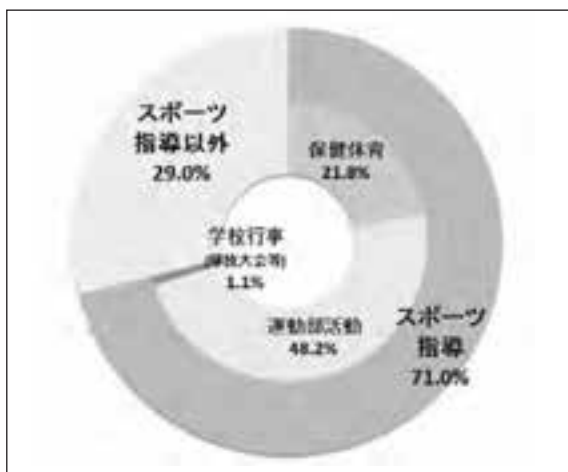
1. エビデンスなき学校安全

教育界には、「学校安全」という言葉がある。古くは1959年に成立した「日本学校安全会法」にその記載をみることができる。教育界は長年にわたって、安全教育や安全管理に力を注いできた。しかしながら、従来の取り組みは「スローガン」の域を出るものではなかった。

不審者対策がそうであるように、私たちはある種の事故や事件に過剰に反応することがある。自治体によっては、不審者情報を保護者に一斉にメール配信する仕組みを整えている。そして不審者が学校に侵入してきた場合に備えて防犯訓練をおこなっている学校もたくさんある。

しかし、それとは別の場面で子どもが重大な事態に遭っている可能性がある。もしそうだとすれば、私たちはそこにより積極的に意識を向けなければならない。子どもの安全をより確かにより効率的に達成していくためには、「子どもの命を守りましょう」というかけ声ではなく、いったいどのような事故がどれくらい起きているのか、できるだけエビデンス(科学的根拠)を用いながら事故の実態を検証していくことが求められる。

学校管理下の事故統計(日本スポーツ振興センター刊『学校の管理下の災害[平成26年版]』)を見てみると、2013年度において中学校では、学校管理下の事故全体のうち71.0%が、スポーツ活動中に起きている。運動部活動は事故全体の48.2%を占めている。高校ではその傾向がさらに強まり、全体のうち81.3%がスポーツ活動中で、運動部活動は56.9%に達する【図1】。これらのデータからは、中学校や高校の事故を減らすためには、まずもってスポーツ活動、とくに運動部活動の指導を注視すべきと結論することができる。



<中学校>



<高校>

図1 中学校／高校の事故全体におけるスポーツ指導中の事故の割合[2013年度]

2. 柔道とラグビーにおける高い死亡率

図2は、過去20年間(1994-2013)に学校管理下の主要部活動において発生した死亡事故の発生率(死亡率)を比較したものである。この数値は、次の方法により得られた。まず日本スポーツ振興センター刊『学校の管理下の災害』ならびに『学校の管理下の死亡・障害事例と事故防止の留意点』を過去にさかのぼり、各部活動の死亡事例を拾い上げることで、死亡事故件数が明らかとなる。次に、日本中学校体育連盟、全国高等学校体育連盟、日本高等学校野球連盟の調査により部員数が把握されるため、上述の死亡件数を部員数で除して、死亡率が算出される。

その結果を見てみると、柔道とラグビーが、群を抜いて死亡率が高い。柔道が10万人あたり2,982人、ラグビーが10万人あたり3,452人である。その次に続くハンドボール部は1を切って0.766人であり、柔道とラグビーの死亡率の大きさがよくわかる。

死亡件数だけでいえば、野球(62人)やバスケットボール(58人)のほうが柔道(52人)よりも多い(なお、ラグビー

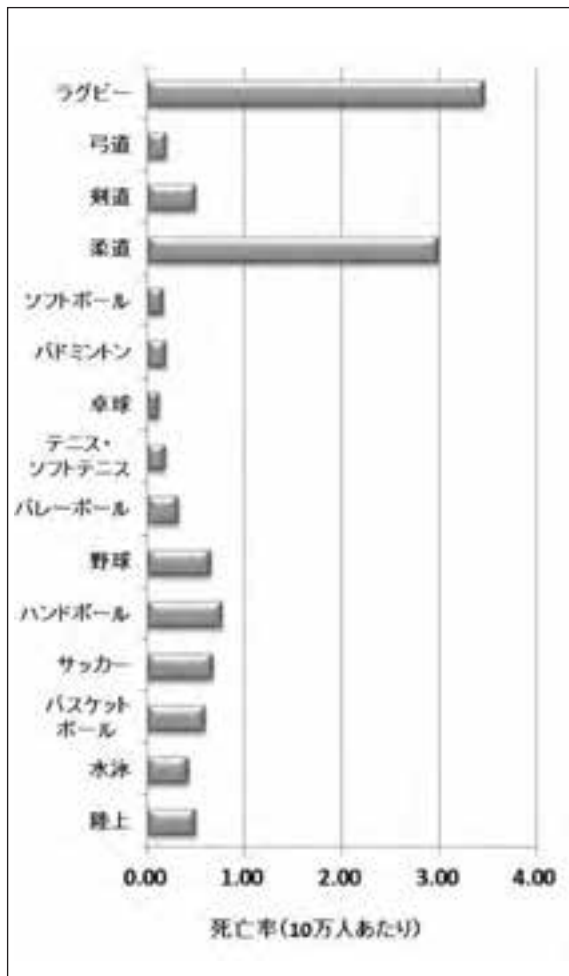


図2 主要部活動別の死亡率[中学校・高校,1994-2013年度]

は25人)。しかし死亡率では、柔道とラグビーは、野球やバスケットボールをはるかに凌ぐ。死亡率の比較は、競技種目そのものがもっている危険性を明らかにする。そしてその結果を踏まえるならば、だからこそ柔道やラグビーをおこなうにあたっては、野球やバスケットボール、その他の競技種目よりも、何倍もの安全面における配慮と対策が必要ということになる。

3. 頭部外傷をいかに防ぐか

学校管理下の柔道では、1983～2015年度までの33年間に120件の死亡事故が起きている(授業中の事故も含む)。死亡率の高さに加えて、死亡件数の多さは、柔道界や教育界のみならず、医療界にも重大なインパクトをもたらした。

柔道事故の問題をきっかけにして、医療界では「スポーツ頭部外傷」が急速に関心を集めている。なぜなら、柔道の主たる死因は頭部外傷によるものだからであ

る。従来から、スポーツにおける四肢の負傷については多くの議論やデータが積み重ねられてきた。だが、命に直接かかわるはずの頭部外傷については、柔道界がそうであったように、スポーツ界全体においても十分な配慮がされてこなかった。それだけに、このところのスポーツ頭部外傷への関心の高まりは、目覚ましいものがある。

スポーツ頭部外傷の予防について、今日強調されるようになってきた事項として、ここで2つのことに言及したい。

第一が、スポーツにおいては頭部外傷(脳振盪を含む)をくり返してはならないということである。スポーツでは、短時間の間に頭部外傷がくり返される可能性が高い。そのくり返しが、ときに致命傷になるということが知られつつある。それゆえ、ひとたび頭部外傷を引き起こした際の競技復帰が重要な論点となっている。アメリカやイギリスでは、「If in doubt, sit them out」(疑わしくは、退場)という標語で、脳振盪のくり返しを防止するための啓発活動が展開されている。

頭部外傷後の競技復帰について、もっとも詳細かつ厳格な規定をもっているのは日本ラグビーフットボール協会(JRFU)である。脳振盪後の競技復帰を定めた「段階的競技復帰プロトコル」によると、常時医師の管理下でない限りは、少なくとも14日間は安静にしなければならない。

スポーツ頭部外傷について踏まえておくべき第二の点が、脳振盪や急性硬膜下血腫は頭部に直接の打撃がなくても生じるということである。脳振盪は、その字にあらわれているとおり、脳が「振れる」ことにより発症するものであり、頭を打ったかどうかで判断を下してはならない。

たとえば相手選手が自分の腰部に正面からぶつてきたとしよう。このとき、自分の頭部はガクンと前方に揺れることがある。このような状況であれば脳振盪が発症しうる。見た目には頭部を打っていないし、本人もそのような自覚がない。それでも脳へのダメージが生じている可能性がある。

学校教育においては、突然死を防ぐための救命措置の方法は学校現場に拡がりつつある。他方で、頭部外傷への意識はまだ低い。スポーツ医学における新しい知見が早急に学校現場に伝えられる必要がある。

愛知大学 地域政策学部 健康・スポーツコース

湯川 治敏(愛知大学)

はじめに

本来は「研究室訪問」ではありますが、今年度設置6年目を迎えた本学地域政策学部の中に、健康・スポーツコースがありますのでここではコースの概要を紹介させて頂くと共に、設置に伴い整備した実習室について簡単に紹介させていただきます。

地域政策学部健康・スポーツコースについて

2011年4月に愛知大学豊橋キャンパスに地域政策学部が設置されました。「地域政策」という学部名はその当時全国で2つ目となる目新しいもので、経済学・法学をベースに「地域を見つめ、地域を活かす」を学部理念としています。学部は5つのコース(公共政策、地域産業、まちづくり、地域文化、健康・スポーツ)で構成されており、各コースがそれぞれ定員を持ち、入試に関してもコース別入試を実施しています。健康・スポーツコースは学部定員220名の中の30名が割り当てられています。地域政策学部に設置された「健康・スポーツコース」であることから、地域の健康政策・スポーツ政策の基本を学ぶとともに、健康産業としてのスポーツやアダプテッド・スポーツなどスポーツの多様な可能性についても追求することを目的としています。

具体的には基幹科目としての「少子高齢社会論」、展開科目としての「健康・スポーツ政策論」、「健康行動論」、「アダプテッド・スポーツ論」、「スポーツ・マネジメント論」、「地域スポーツ運営論」等の講義科目が開講されています。さらに展開科目の中には「スポーツ心理学」、「運動生理学」、「セーフティ・マネジメント」、「スポーツ・バイオメカニクス」等が開講され、社会科学系のための科目だけではなく一部自然科学系の実験を伴うような科目も開講しています。演習系科目としては「スポーツ方法」として各種スポーツ種目の指導法を含めた授業内容としています。

前述のように学生は各コース別に入学しますが、教員は必ずしもコース所属になっている訳ではありません。ただ、健康・スポーツ関係を専門とし、3,4年生のゼミを担当する教員は4名でありそれぞれスポーツ社会学、スポーツ・マネジメント、健康・スポーツ心理、スポーツ工学関係のゼミを開講しています。

また、資格としては「初級障がい者スポーツ指導員」、アメリカ心臓学会Heartsaver@CPR/AEDの資格が

取得可能であり、日本体育協会の「スポーツリーダー」、「アシスタントマネージャー」等の取得も勧めています。

設置6年目を迎え2016年3月には第2期生を社会に送り出しましたが、就職先としてはスポーツ関係を含む一般企業はもちろん学部全体として公務員志望が多い為か、この2年間で健康・スポーツコースの卒業生が静岡、豊橋、可見市役所、愛知県警、愛知県小学校教諭等の公務員にも採用されてきました。今後、この傾向が続くかどうかは定かではありませんが、健康・スポーツコースで学んだことが社会の様々な分野でも発揮出来る様なカリキュラムであることが望まれていると考えています。

健康・スポーツ実習室の整備

地域政策学部自体が社会科学系学部であることから健康・スポーツコースに所属する学生が健康・スポーツに関する社会科学系分野に興味を抱き、それに沿ったカリキュラムが構成されていることは当然です。一方で自然科学的分野の軽視を生じさせないためにも「運動生理学」、「スポーツ・バイオメカニクス」などの実験を含む科目を開講しています。しかしながら大学自体に自然科学系の実習室や実験室が無かった為に地域政策学部設立当初に「健康・スポーツ実習室」の設置を要望した結果、段階的に実験・実習等の出来る実習室を整備することが認められました。規模としては150名程度収容の一般教室(約170㎡)を6:3:1の広さに3分割し、最も広い部屋を実習室、2番目を学生自習室あるいは講義室、最も小さい部屋を準備室として整備しました。実習室および準備室には各種測定装置および分析用ソフトウェア等を購入し、いくつかの演習科目およびゼミナール、卒業研究等の実験、分析等で活用しています。また、卒業研究では既存の測定装置などを利用出来ない場合には測定装置を自作したり、実験装置を製作するため、作業スペースを設けてあり、ボール盤や電動工具、電子パーツ、電気工作工具等を揃えてあります。

各種測定装置・分析ソフトウェア等について

以下に「健康・スポーツ実習室」に整備した測定装置およびソフトウェアとその用途などについて紹介します。

・3Dモーションキャプチャシステム

米国Natural Point社製3Dモーションキャプチャシス

テムOptiTrackを購入しました。Ether接続のカメラS250eを8台と同期装置も購入したため最大250Hzの周波数でサンプリングが可能であり、フォースプレート等の信号とも同期が可能な環境になっています。なお、データ収集ソフトウェアとして人体モデルを仮定した同社のMotive:Bodyおよびモデルを仮定しないMotive:Trackerを利用しています。また、データ収集後のポイントソーティングおよび分析ソフトウェアとしては株式会社ノビテック製のVinus3Dを用いています。この機器はスポーツ・バイオメカニクスやゼミナール、卒業研究等での利用が多く、高い頻度で利用されるために、実習室内に常設し、関連機器の電源を投入するだけで測定が可能な環境にしています。

・フォースプレート

実習室として与えられた教室は幸い1階だったため、Kistler社製フォースプレートを設置する為のベースの工事を行い、プレートを床にボルト固定することが可能となりました。但し、フォースプレート測定面を床面に合わせるような埋設工事は高額だったため諦めざるを得ず、床面に固定できる工事とし、フォースプレートの測定面に合わせるように廃棄処分となった教室の教壇を加工しプラットフォームを作成しました。これにより3m×4m程のフラットなスペースの中央にフォースプレートが配置される測定空間が出来、上述のモーションキャプチャと合わせた測定が可能となりました(図1)。この機器もモーションキャプチャ同様スポーツ・バイオメカニクスやゼミナール、卒業研究等で多用しています。

・高速ビデオカメラ

Vision Research社製Phantom Miro eX4を導入しました。このカメラは解像度800×600でカラー映像最大1260fps、最大コマ数約11万コマを撮影が可能です。授業ではスポーツ・バイオメカニクスにおいて、また、ゼミナール、卒業研究において多用される機器です。また、撮影後に自動追跡ができるDETECT社製Dipp-Motion Vを利用しています。

・モーションセンサ、筋電センサ

ウェアラブルセンサとして(株)スポーツ・センシング社製小型9軸ワイアレスモーションセンサおよび筋電センサを購入しました。筋電センサは運動生理学やその他科目においてもデモンストレーション用として利用したり、卒業研究として利用しています。また、制御ソフトウェアはiPadのアプリケーションとなっており実験風景を動画に記録しながら計測波形をモニタリング出来る機能が重宝しています。

・ストレインゲージ+ストレインアンプ

ラケットのひずみや金属パイプを利用した力のセンサの作製、またストレインゲージ型加速度計での加速度測定等様々な測定において用いられるストレインアンプを購入しました。授業としてはゼミナール、卒業研究等で様々な用途で利用しています。

以上、簡単ではありますが、コースの紹介と学部設置に伴い整備した健康・スポーツ実習室を紹介させて頂きました。



図1 モーションキャプチャシステムとフォースプレートでの実験風景

南山大学における体育教育の取り組み

金 興烈(南山大学)

1. 南山大学の歩み

本学は、1932年カトリック教会の男子修道会の一つである「神言修道会」を母体として、名古屋教区長のヨゼフ・ライネルス神父が南山中学校を設立し、1949年に外国語専門学校を引き継ぐ形で南山大学の開学へと繋がってきた。現在は、8学部17学科を擁する総合大学として発展している。開学以来、文系・理系を併せ持つカトリック系総合大学としてキリスト教世界観に基づく学校教育を建学の理念としている。また、この建学理念に具体的な方向性を与えるために、「Hominis Dignitati (人間の尊厳のために)」という教育モットーを掲げている。今後の展望として、2017年に瀬戸キャンパスの全学部・全学科を名古屋キャンパスへ統合し、本学のビジョンである「個の力を、世界の力に。」を具現化していく。



写真1. 神言神学院・名古屋キャンパス全景

本学には、体育・スポーツ関連の学部・学科がないために、ここでは、私個人の研究だけではなく、学生たちの体育・スポーツ活動の現状と体育教育の取り組みについて紹介する。

2. 課外活動(体育・スポーツ系クラブの活動)

南山大学のイメージは、外国語教育を重視した文系大学として知られているが、開学以来、学生のスポーツ活動は体育・スポーツ関連学部引けを取らないほど活発におこなわれている。また、大学も積極的な支援策を持って対応している。学生の課外活動状況については、所属クラブ数の推移で確認することができる。現在、本学の体育系クラブは48団体、文化系クラブは43団体の割合である。その内、全学生の約25%が体育系クラブに、約20%が文化系クラブに所属している。つまり、本学の課外活動参加者は約45%の割合で体育会・文化会活動に参加していることになる。しかも、約2,300人以上の学生がスポーツ活動に関わっていることになる。この参加人数は、体育・スポーツ系の学部・学科が開設されている大学にも劣らないほどの数ともいえる。まさに、

文武両道を目指して日々努力している様子が見受けられる。学生たちの体育・スポーツ活動は、リーグ戦および大会に参加して良い成績を収めることを目指している。ここでは、本学において最も重要な行事の一つである「上南戦」について紹介する。上南戦とは、上智大学・南山大学総合対抗運動競技大会を称するもので、今年で第57回大会が南山大学で開催される。半世紀以上もの間、1年ごとに上智大学と南山大学で交互に長きにわたり続いてきた上南戦は、私立2大学における総合対抗運動競技大会として最も古い歴史と伝統を持つ大会でもある。毎年6月に2泊3日間、両校約2,000人以上の学生が32種目に参加し、熱い戦いを繰り広げている。しかも大会は、すべて両校の学生組織で構成された「上南戦実行委員」によって企画・運営され、互いに励まし合い、競い合い、讃え合う、ことの中で若さ溢れるキャンパスライフを過ごしている。近年では、大学の支援と学生自らの取り組みもあって、日本代表選手に抜擢される学生も出ており、活躍場も大きく広がっている。大学では、このように大会で良い成績を収めたり、代表選手になったりする学生・団体を応援するため、毎年、様々な表彰を行うなど学生たちの課外活動参加を積極的に促している。



写真2. 第56回上南戦パンフレット・試合の様子

3. 体育教育の理念・目的

本学における体育教育は、現代社会が抱えている様々な諸問題の中でも、とりわけ人の生活の基礎となる健康の維持・増進を推奨する取り組みを体育教育の理念・目的としている。日本は世界でも例がないほどの経済成長を実現し、近年の研究・医療水準は世界を牽引するレベルにまで成長している。このような先端技術の恩恵を受けながら、健康に対する意識も年々高くなっている。一方、文部科学省で実施している「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によれば、小・中・高の体力水準に二極化が見られ、家庭・地域との連携が強調されている。この問題は、本学においても同様であるといえ

る。前述したように体育・スポーツ系クラブに参加する学生が多数いる反面、身体活動に消極的な学生も多く見られる。この現状には、細い体型を理想とする女子学生が多いことや、体づくりとして運動・スポーツの実施よりも食事制限やダイエット食品に頼る者が増加するなど時代的背景の変化を強く感じるところである。

本学における体育教育では、このような間違っただけの情報ではなく、正しい情報を教えるのも一つのねらいである。また、様々なタイプの学生が多種多様な価値観と目標を持って学生生活を送っている。この意味で、体育科目は、個人の健康や体力維持・向上に貢献するだけではなく、もう一つの側面として学生同士による競争環境の中で積極性・協調性・責任感を養うことで他者とは違う個性の発見は当然のこと、建学の精神である「人間の尊厳」を学び、社会の中でリーダーシップを発揮できる人材教育の実践をねらいとしている。

4. 体育教育の取り組み(実態・施設)

本学の体育科目には、全学必須科目として1年生を対象に開講している基礎体育A(春),B(秋)とこの単位を修得した2～4年次生を対象に選択科目として開講しているスポーツ実技がある。基礎体育Aは、3種目の組み合わせによる4つ(瀬戸キャンパス)または6つ(名古屋キャンパス)のコースから選択し、様々な特性を持った複数の運動やスポーツを体験する。一つの例としてフィットネス種目では、体力診断テストを行い、個々の体力レベルに合った健康づくりのための運動処方を実施している。特に骨密度や身体組成の結果は、学生たちの中で人気のある項目である。

基礎体育Bでは、1種目を履修者に選択をして実施する。実施種目は、テニス、ゴルフ、卓球、バドミントン、フィットネス、バレーボール、ユニホッケーなど種目で開講している。一方、スポーツ実技では、それぞれ名称の異なる6種目を開講し、3年間で複数履修することができる。登山・キャンプとスキーについては、学外授業として集中で実施しており、大学で初めて経験するものが多く人気の高い種目である。また、本学では、実技科目だけではなく、全学共通教育科目群として健康科学論、スポーツ科学論も開講している。健康科学論では、毎年150人を超える学生が受講しており、男女比としては女子学生が多い現状である。スポーツ科学論については、健康科学論に比べ若干少ない受講者(50～70名程度)ではあるが、体育会に所属している学生も多く競技力向上を求めてくる傾向がある。授業の運営について、健康科学論では、ADLやQOLに関するカレントトピックを中心とした講義を実施し、受講者同士で国民健康医療政策に関する意見交換の場を提供している。一方、スポーツ科学論では、運動生理学とバイオメカニクスの基礎を取り入れ、簡単な実験からデータ解析を実施している。主に使うのはカメラ、筋電センサー、Excel、ImageJソフトを

用いている。

瀬戸キャンパスの体育施設は、体育授業を始めクラブ活動、サークル活動として利用している以外の時間は、個人あるいは友達同士の利用が可能である。トレーニングルームには、トレーニングマシンや自転車エルゴメータ、ランニングマシンを常備しており、日々活用されている。



写真3. 体育施設(瀬戸キャンパス)

5. 地域貢献

瀬戸キャンパスでは、学生生活や健康維持・向上に貢献するための体育授業を展開している一方、地域貢献活動も積極的におこなっている。一つとして、瀬戸市と本学の連携事業である瀬戸コンソーシアムを始め、地域在住高齢者向けの健康教室を開き高齢者健康づくりに貢献してきた。また、地域の中・高等学校と連携し、健康診断日に骨密度測定や身体活動アンケートを年1回実施し、青少年の健康づくりや健康意識を養う取り組みもおこなっている。骨密度、身体活動アンケートは集計し、検証を行うなど学生や地域住民の健康づくりのためにフィードバックしている。また、蓄積されたデータは同意のもとで研究報告の形で発信している。

6. おわりに

2017年には、瀬戸キャンパスのすべての学部・学科が名古屋キャンパスに移転する。同時にクォーター制も全学で導入することが決まっている。クォーター制導入は、大学の国際化と教育・研究の質の向上をもたらすための基盤改革であり、大学のさまざまな将来構想の実現に資する大改革である。それと連動して、名古屋キャンパスでは、約9,000人以上の学生が在学する試算となり、1学年の学生数は約2,100人を超える。現在は限られた施設を最大限に利用して体育科目の授業展開を駆使している現状である。また、クォーター制導入により今まで以上に非常勤講師の依存度も高くなることが考えられる。キャンパス移転とクォーター制導入という過渡期に入る本学では、今まで以上の質の高い体育教育を提供していくための工夫と努力が試される時期でもあるだろう。今後、体育教員として質の高い教育は当然のこと、活発な研究活動も重要である。また、近隣大学との協力体制も一層求められることになると予想される。今後ともよろしくお願い致します。

企画委員会活動報告

企画委員長 春日 晃章(岐阜大学)

2015年度は、企画委員会の活動として例年通り、6月の「講演会」および12月の「研究セミナー」の開催の二つを企画し、実施した。

講演会は、平成26年7月5日(土)、名城大学天白キャンパスに於いて、(株)名古屋グランパスエイト代表取締役社長の久米一正氏には、「人を束ねる ～GMの仕事とは?～」というテーマで、さらに、フォルトゥナ・デュッセルドルフ日本デスクの瀬田元吾氏には、「ブンデスリーガクラブにおける日本マーケティング業務について」と題して講演頂いた。

久米氏の話では、一つのチームをまとめ、経営的戦略を練る術なども含め、単なる競技力向上だけでなく、一流クラブ運営の多角的な発想や運営面を感じ取ることができた。また、瀬田氏には、世界の視点から見た日本のプロスポーツの発展や売り出し方に関する視点でお話頂いた。多くの学生、大学院生も参加して聴講していたが、どれも新鮮な話で、生きたスポーツマネジメントの現状を身近に感じることができ、有意義な講演会となった。

【東海体育学会講演会】

日時:平成27年6月13日(土) 15:00～17:00

会場:名城大学天白キャンパス

講演①テーマ:人を束ねる ～GMの仕事とは?～

講師①:久米一正 氏

((株)名古屋グランパスエイト代表取締役社長)

講演②テーマ:ブンデスリーガクラブにおける日本マーケティング業務について

講師②:瀬田元吾 氏

(フォルトゥナ・デュッセルドルフ日本デスク)

企画委員会では、2012年度から、各研究分野の研究動向や研究成果の到達点などを交流し、体育学の可能性や課題について考える機会をつくりたいという趣旨から上記の研究交流委員を中心とした研究セミナー(テーマ:東海体育学会における研究のアップデート)を開催してきた。2015年度も平成27年12月5日(土)、名城大学天白キャンパスに於いて「東海体育学会研究セミナー」を開催した。今回の企画に快く賛同して頂き、領域を代表して発表して頂いたのは、スポーツ医学分野の藪本 保先生(岐阜大学:現 名古屋学院大学)、介護福祉・健康

づくり分野の坂井智明先生(名古屋学院大学)、発達分野の藤井勝紀先生(愛知工業大学)であった。なお、座長は館 俊樹先生(静岡産業大学)が務めた。

日頃は関わることの少ない他領域の研究視点や研究方法について触れ、終始、活発な質疑応答がなされた。セミナー終了後は、同大学近郊にて情報交換会(兼忘年会)が開催され、各発表に関するディスカッションの続きや、大学や研究を取り巻く様々な情報交換と人的交流がなされ、意義深い一日となった。

これらのセミナーや情報交換会をきっかけに、研究の輪が大きくなることを切に望むとともに、今後も多くの研究者が参加されることを期待したい。

【東海体育学会研究セミナー】

日時:平成27年12月5日(土) 16:00～18:00

会場:名城大学天白キャンパス

テーマ:研究のアップデート(Part IV)

演題Ⅰ:脳性麻痺児の体力向上を目的とした運動プログラムの開発

～Whole-Body Vibration(WBV)を用いたトレーニング～

藪本 保先生(岐阜大学) スポーツ医学領域

演題Ⅱ:健康長寿社会の実現に向けた体育・スポーツ分野からのアプローチ

坂井智明先生(名古屋学院大学) 介護福祉・健康づくり領域

演題Ⅲ:健康科学と経営学との融合を目指して

ーヒトの発達システムの標準化とプロポーション変化ー

藤井勝紀先生(愛知工業大学) 発達発達領域

講演会と研究セミナーともに非常に実りある内容であったが、昨年同様、告知期間の問題などもあり、学会員の参加者がやや少ないのは残念であり、今後の課題でもあろう。特に若手の研究者の皆さんにとっては自分の専門だけでなく、他領域・他分野の専門的な話を聞き、人的交流を深めることのできる絶好の機会でもあるので、ぜひ積極的な参加を期待したい。

編集委員会活動報告

平成27年12月25日付けにて「スポーツ健康科学研究」第37巻を発行いたしました。「スポーツ健康科学研究」の名称になり、今回で3巻目です。本巻では、総説1編、原著論文1編、資料論文2編が掲載されております。ご投稿いただいた先生方、ならびに査読の労をとっていただきました諸先生方には、厚く御礼申し上げます。

東海体育学会第63回大会開催時に、編集委員会を中心とした「東海体育学会学術奨励賞」選考委員会を開催し、平成27年度東海体育学会学術奨励賞の受賞候補者2名を選考して理事会に推薦しました。平成26年度に推薦された2名の論文については平成28年になってから受理されましたので、平成28年度の大会時に授賞式の予定です。

前・編集委員長 重松 良祐(三重大学)

なお、今年度末に発刊予定の第38巻につきましては、10月までに審査終了して受理されれば掲載に間に合います。掲載を希望される先生方は夏までに投稿していただきたいと思います。メールによる投稿が可能になり査読期間が短縮しています。是非とも研究成果を「スポーツ健康科学研究」にご投稿くださるよう、よろしくお願いいたします。

広報委員会活動報告

2015年度の広報委員会では、これまでの業務内容を踏襲して以下の活動を行った。

1.東海体育学会会報の発行

No.88を2015年6月15日付けで発行した。掲載内容は、巻頭言、研究情報、各種委員会の活動状況報告、2014年学会大会の振り返り、2015年学会大会の案内、学術奨励賞の受賞談、ペルー訪問記とモンペリエ第一大学での在外研修報告、特色ある大学の研究室訪問（東海学園大学、皇學館大学）、庶務委員会からのお知らせ、理事会議事録、会則などであった。

広報委員長 西田 保(愛知学院大学)

2.東海体育学会ホームページの運営管理

スポーツ健康科学研究Vol.36(2014)、Vol.37(2015)を掲載し、投稿論文規定を更新した。また、東海体育学会第63回大会、2015年度東海体育学会研究セミナーの案内を掲載した。

第63回東海体育学会大会報告

学会大会委員長 池上 久子(南山大学)

第63回東海体育学会大会報告

1.大会の概要

日時:2015年10月24日(土)午前9時30分から午後5時00分

場所:愛知県立大学 学術文化交流センター

内容:一般口頭研究発表(13演題)、ポスター研究発表
(11演題)、シンポジウム、学会総会

参加者:会員63名、顧問3名、当日会員34名、実行委員18
名、補助委員5名、協賛業者8名、シンポジウム
のみ一般参加者5名、合計136名

展示協賛:教育シューズ振興会、丸丹スポーツ用品株式
会社

広告協賛:モリタ運動具店、株式会社テック技販、株式会
社フォーアシスト

2.大会の概要

第63回東海体育学会が10月24日(土)に、愛知県立
大学学術文化交流センターにて開催された。



大会が愛知県立大学で開催されたのは、1969年2月
の第16回大会以来の47年ぶりである。愛知県立大学
の湯海鵬先生、丸山真司先生、稲嶋修一郎先生が中
心となって実行委員会を組織し、準備が進められた。演
題数は、口頭発表、ポスター発表を合わせて24演題あり
、多くの研究者の発表の場となった。そのため、口頭研
究発表は、2会場を設定して行われ、いずれの会場とも
終始、活発な質疑応答がなされた。



昼食後の総会をはさみ、シンポジウムでは「教養とし
ての体育・スポーツー大学教育における体育のレーズン
デートル(存在意義)を問うー」と題して、4名の演者が登
壇した。会場は、多数の参加者によってほぼ満員の状
態であった。この後ポスター発表が行われ、演者が3分
ずつのプレゼンテーションを行った後、質疑応答が行わ
れた。最後まで多くの研究者同士がディスカッションを続
け、大盛況のうちに無事学会を終了した。

この後、大学内の食堂において情報交換会が開催
された。軽食と飲み物が準備され、和やかな雰囲気
の中で、和気藹々と歓談がなされた。それぞれの大学の
現状や情報が交換され、非常勤講師の依頼の場ともな
った。特に今後大学の教育に携わっていこうとしている
学生にとっては、多くの教員と面識を持つチャンスともな
ろう。積極的に参加してもらいたいと思う。



東海体育学会63回大会を終えて

東海体育学会第63回大会実行員長 湯 海鵬(愛知県立大学)

東海体育学会第63回大会は、2015年10月24日(土)に愛知県立大学長久手キャンパスで開催されました。会員の皆様の協力のお陰で、口頭発表13題、ポスター発表11題の計24の発表演題で、合計136名の参加者が集まる大会となりました。



1967年第16回大会の大会事務局長の豊島進太郎先生(右)と筆者

大会の開催に際しましては、学会担当の理事を始め、多くの先生方からアドバイスをいただき、また原稿修正や協賛者の推薦などにもご協力いただきましたことを心から感謝致します。

本学での開催は、前回の当番校であった第16回(1969年2月)以来、47年ぶりの出来事です。大変幸せなことに、大会中に第16回大会の事務局長であった豊島進太郎先生(写真、東海学園大学)が来場され、約半世紀ぶりに再び本学で開催できることを実行員たちと共に喜んでくださり、感無量でした。47年の長い年月が経ちましたが、体育学研究の先輩である豊島先生が未だに教育・研究の第一線に立っていらっしゃることに大

変感服させられました。

大会の前に、今年度のノーベル各賞の発表がありました。大変うれしいことに、今年も二人の日本人の受賞者が出ました(私事で大変申し訳ないですが、私の出身国の中国本土では、初めて自然科学分野での受賞者が出ました)。2000年以降の国別受賞者の数をみると、日本は米国に次いで第二位にあります。それは、日本の自由闊達な研究環境と日本人研究者の地道で創造的な研究活動に対する最高の評価です。体育科学の分野でも、日本は世界レベルに追いつき、今は世界トップレベルに位置していると思います。それも体育科学研究者の優秀な才能と長年続く地道な努力によるものだと思います。我が東海体育学会大会も第63回を迎え、長年培ってきた教育と研究の功績は非常に大きく、先人達と皆さんの並々ならぬ努力は尊敬され、誇れるものだと思います。

東海体育学会のような地方学会の良いところは、違う研究分野の研究者が一堂に集まり、研究発表や意見交換ができることにあります。それにより、個々の研究者が自分の狭い研究分野から視野を広げることができ、また近隣にいる研究者同士での共同研究が促進されます。

2020年には二度目の東京オリンピックが開催されます。前回の開催と同じように、日本の体育科学は新たな刺激をもらい、これからの世界を牽引するほどの飛躍をみせることでしょう。東海体育学会も、それを契機に、地域に根ざした特色のある地方学会としてより一層発展していくことが期待されます。

最後に、今大会は本学大学院生、研究生の支えにより支障なく運営出来たことを申し添えます。またご協賛いただいた企業関係の皆様へ心より厚くお礼申し上げると共に皆様のご協力とご参加に感謝致します。

東海体育学会第63回大会見聞録

学会大会委員長 池上 久子(南山大学)

東海体育学会第63回大会が、愛知県立大学長久手キャンパス内の学術文化交流センターにおいて開催されました。第1回東海体育学会は1951年(昭和26年)に名古屋大学で開催され、その後、回を重ね63回大会を開催することができました。愛知県立大学での開催は第16回(1969年2月)以来、47年ぶりとなりました。実行委員会は愛知県立大学の教員と大学院生、学会大会委員で組織され、大会準備が進められました。

当日は9時30分から受付が開始され、その後、多目的ホールと小ホールの2会場で13演題の一般口頭発表が行われました。いずれの会場とも活発なディスカッションがなされ、5分程延長して終了しました。昼食後には、シンポジウムが開催され、会場には学会参加者のほかに多数の聴講者がありほぼ満席の状況でした。その後、11演題のポスター発表が行われ、会場は多数の聴衆者で込み合っていました。

以下に東海体育学会第63回大会の各座長から報告された概要と要旨を報告いたします。

シンポジウム報告

テーマ:教養としての体育・スポーツ

—大学教育における体育のレーゾンデートル(存在意義)を問う—

愛知県立大学 丸山真司

東海体育学会第63回大会(愛知県立大学)においては「教養としての体育・スポーツ—大学教育における体育のレーゾンデートル(存在意義)を問う—」というテーマでシンポジウムが開催された。今回のシンポジウムでは大学体育の理論的・実践的な話題を4名のシンポジストに提供していただきながら、これからの大学教育における体育の意義や課題について議論した。

まず最初に、岡出美則氏(筑波大学)は「体育で育てるべき教養とは何か」というテーマで、スポーツ教育学の国際的な視野から体育という教育の存在意義をめぐる問題や課題について話題を提供してくれた。次に吉田文久氏(日本福祉大学)が「日本福祉大学における『スポーツ実技』の実践～27年間続けてきた『通年1種目』の取り組み～」と題して、12年間(小・中・高校)の体育の学びの上に「大学体育」は何を教えるべきかという探究の末に構想された日本福祉大学の実践を報告した。3番目に成瀬徹氏(「体育とスポーツの図書館」館長)が「大学における体育実践の柱」と題して、自らの体育実践で重視している①グループ学習、②発展史を中心と

するスポーツ文化学習、③イベントづくり—消費者から文化創造への第一歩という3つの柱について報告した。最後に、金興烈氏(南山大学)が韓国の大学体育の動向について詳細に述べてくれた。

シンポジウムの中で議論された大学体育の存在意義について簡潔にまとめれば、それは、生涯に渡って生活の質や社会を豊かにする運動・スポーツの知識やスキルを、さらに歴史や社会の中に位置づく運動・スポーツの文化的・科学的知識(スポーツインテリジェンス)を大学という高等教育機関だからこそ意図的に学ばせ身につけさせることが大学体育の任務になるというものであったように思われる。

大学設置基準の大綱化によって大学体育の「必修」が制度的に外される前年(1990年)、東海体育学会では今回と同様のシンポジウムや論議が展開された。そしてそれから25年経った今、それぞれの大学でどのような成果と課題があったのか。今回のシンポジウムでこの問題が整理できたとはいいがたいが、少なくともシンポジウムに参加された先生方が今日の大学を取り巻く状況の中で、各大学において体育・スポーツ科学の専門家として大学体育の存在意義という問題に向かい合い、思考し、新たな実践を創造していくきっかけを今回のシンポジウムは提供したのではないかと自負している。東海体育学会が大学体育についての理論や実践の交流の場としての役割を担い、これからも継続的に議論を積み上げていくことが重要ではないだろうか。

一般研究発表 口頭発表

A-1～A-3(発育発達)の発表について

岐阜聖徳学園大学 小栗和雄

定刻10時10分から発育発達分野の口頭発表が開始された。

A-1:年長男児62名の中から運動能力得点が上位群と低い下位群を抽出し、1時間の自由遊びの中で発せられた言葉を録音した。記録された言葉を勧誘・提案、情報伝達など7項目に分類して上位と下位を比較した結果、上位群は情報伝達や依頼・命令に関する言葉が多いことが報告された。

A-2:小中学生の女子671名を対象に、後方視的に小学1年生から中学3年生までのBMIと体脂肪率のデータを得て、それぞれのMPV年齢を特定し、BMIと体脂肪率の発育現量値曲線と発育速度曲線の類似性を検討した。その結果、BMIと体脂肪率は発育現量値曲線

で $r=0.96$ 、発育速度曲線で $r=0.83$ と極めて高い類似性を示した。

A-3:小学5年生から高校3年生までの一般女子93名と女子スポーツ選手141名を対象に、初経年齢と月経痛症を比較した結果、女子スポーツ選手の初経年齢は13.32歳と遅く、月経による痛みの程度も強いことを示した。

3演題に対してデータ分析の観点や方法に関する活発な質問が出され、若手の発表者にとって有意義な時間であったと思われる。

A-4～A-7(バイオメカニクス)の発表について

南山大学 池上久子

A-4:野球のバッティング動作とゴルフのドライバーショットにおける下肢関節パワーに注目し、その違いを運動力学的観点から比較検討した。野球とゴルフでは同じ打動作でも下肢関節パワーの発揮様相が異なることが明らかとなったことが報告された。しかし、野球とゴルフの被験者はそれぞれ1名で、個人差かどうかの検討も必要であろう。

A-5:野球のバッティング動作におけるバットのダイナミクスを分析し、バットヘッドを加速させるメカニズムについて検討した。グリップトルクの発揮に伴ってバットの回転パワーが増大し、インパクト直前ではいずれも減少した。野球のバッティングでは、グリップトルクによる回転パワー、次いでインパクト直前では並進パワーの増大によってバッドヘッドは加速することが示唆された。

A-6:異なる競技レベルのバドミントンプレイヤーを対象に、競技レベルが予測タイミングに与える影響を明らかにすることを目的とした。ドロップショット及びハイクリアに対する受ける側の予測タイミングは競技レベルに応じていることが示された。しかし、第3者から打たれたハイクリアをドロップショット及びハイクリアで打つ打ち側の予測タイミングは技術レベルに対し差はなかったことが示された。

A-7:16名の被験者に対し、LEDの昼光色と赤色の作業環境の中でダーツゲームの到達位置を測定し、作業環境の色彩変化が動作正確性に与える影響を明らかにすることを目的とした。昼光色から赤色に変更した直後、上に当たる回数が上がり、下に当たる回数が下がる傾向が見られた。逆に赤色から昼光色に変更した直後、上に当たる回数が下がり、下に当たる回数が上がる傾向が見られたことが報告された。

B-1～B-3(体育科教育)の発表について

愛知淑徳大学 松田秀子

B-1:体育実技に、ランダムに選択した音楽(JPOPや洋楽)を取り入れ、学生の授業意欲および運動能力の

向上を目的としたものであった。授業後のアンケート調査を分析した結果は、「気持が昂る」「気持が明るくなる」「動機づけが上がる」など心理的に作用する働きがあり、授業の効果に有用性があったことが示された。今後は、アンケート項目の改善やデータ数の不足を検討していく必要があろう。

B-2:中学校における「武道必修化」の以前と以後に関して、柔道負傷事故件数がどのように変動したのか、その推移を明らかにすることを目的としたものであった。柔道中の頭部外傷による事故に対する危機感を高めた結果、柔道の参加生徒数が大幅に増加したにもかかわらず、負傷事故は抑制されたとことが示された。今後、柔道負傷事故のみならず組体操などの負傷事故についても研究を発展させていくことにより、事故が抑制されることを期待したい。

B-3:スポーツ授業に、iPadを活用し授業内容を充実させて教員のICTリテラシーを向上させ授業運営に関する軽減を図ることを目的としたものである。教員から肯定的な意見を得ることができ概ね好評であったことが示された。さらにFDの結果は、モバイル端末について意欲的な意識はあるが、一方でICTに対する苦手意識が根深いことも示された。今後は、卓球・バドミントンなどの種目についても継続的な研究を期待したい。

B-4～B-6(健康科学、スポーツ傷害、体育社会学)の発表について

愛知教育大学 合屋十四秋

B-4:女子大生の体型意識、身体の満足意識、接触態度等が月経周期の異常発現にどのように影響するかを理想の体格と関連づけた調査、研究の紹介であった。フロアーから体育の実技授業がそれらに対してプラスの貢献をするかの質問があったが、現段階では有意な変化は見られなかったと報告された。大学生活4年間の全般に亘って調査、研究するとどのように変化、影響するのかに今後の課題があるように思われた。

B-5:小学校ミニバスケットボール選手とジュニアサッカー選手の傷害発生率の調査研究では、ミニバスの練習や試合時の発生率はサッカーのその2倍近くであり、上肢、頭部、顔面の部位に多く見受けられたことからその対策や防止策の必要性が報告された。コート広さや競技人数との関連について言及されなかったため、今後これらの影響の有無も検討されると傷害の実態がより明確になるのではないかと思った。

B-6:高等学校における学業とスポーツの両立、「文武両道」の取り扱いをインターネットのホームページ上の情報を基に検討、紹介された。偏差値区分および知徳体と文武両道の文言の有無の関係性から、前者の上位校は文武両道を用いる傾向が高かったが、後者は偏差

値間の差異は小さかったことが報告された。ホームページの情報のみであるのもう少し多角的な資料や実態を裏付ける検討が必要ではないかと思われた。

一般研究発表 ポスター発表

C-1～C-6(発育発達、幼児期の体力・生活習慣)の発表について

愛知県立芸術大学 石垣 享

C-1:幼児から児童にかけて体力の縦断的な加齢変化を検討した貴重な発表であった。ここでは、男子の幼児期の体力向上量がそのまま児童期後期まで持ち越すが、女児ではそうではなく、明らかな性差が認められた内容であった。

C-2:小児のメタボリックシンドロームに関する発表であり、小児肥満は内臓脂肪型よりも皮下脂肪型の肥満を示す知見が披露された。しかし、動脈硬化危険因子の多くは、皮下脂肪よりも内臓脂肪面積の身長比と有意に高い相関関係であったことが示された。

C-3:幼児の超音波法による骨密度の加齢変化から5段階の評価チャートを構築する内容であった。両項目の最小二乗近似による最適な多項式は、男児では3次、女児では4次となり、これらを基に評価が可能であることが示された。

C-4は、男子大学生のBMIと身体組成を基に9分類し、これらの体力レベルを比較検討した内容であり、BMIによる肥満群は体脂肪率の過多によらず体力は低く、BMIが標準で体脂肪率が低い群の体力が高いことが示された。

C-5:幼児の体組成と運動能力を検討した斬新な内容であった。幼児期の男女では身体組成と運動能力に明確な関係は示されなかったが、肥満の男児では走能力、跳躍力および俊敏性がそうでない群より有意に低値であるが、女児においては全ての項目で有意差が認められないことが示された。

C-6:保護者が自身の子どもの運動への関心度とその子どもの運動能力の関連性を検討した内容であった。これら両者に有意な関係は認められないものの、運動能力テストの結果を両親に伝えることで子どもの運動への関心が高まり、日々の運動習慣へ発展させる可能性が示唆された。

C-7～C-11(体育科教育、アダプテッド・スポーツ科学、体育心理学、体育方法)の発表について

岐阜経済大学 伊藤嘉人

C-7:高等学校における教育現場、運動部活動におけるICT活用の現状ならびに課題や問題点を明らかにし、ICTを活用する環境について検討された。各部活動に行われたアンケート結果より、ICTに関わっては、パソ

コン室などを活用してインターネットや動画からスポーツに関する知識について学習できるのではないかと示唆された。

C-8:保健体育科教育法(ダンス)授業における大学生の授業評価アンケートを効果的に授業改善に活用するための方法が検討された。上位項目の「楽しい・面白い」、「わかった・なるほど」、「身に付いた」においては、回答の水準が明らかに偏っており、単純な平均値が有効でない可能性が示唆された。また、男女の水準回答率の差異は、「楽しい・面白い」、「わかった・なるほど」、「身に付いた」では有意差は認められなかった。しかし、「授業実施に対する不安」については、有意差が認められ、男子が女子よりも強く不安を抱えている傾向があると示された。

C-9:名古屋市で開催された障がい者スポーツイベントの準備段階とそのイベント活動を通して見えてきた課題をまとめ、スポーツを活用した障がい者の自立支援にむけた官学連携の在り方について検討された。とりわけ本研究では、学生ボランティアの活動内容をまとめ、障がい者スポーツ指導員取得後の活動の場として、地域スポーツイベントを教育活動の中に位置づけるための課題が明らかにされた。

C-10:ゴルフのスイングフォームから打球の結果、飛距離、球筋等を予測する運動の他者観察能力テスト(ゴルフスイング観察テスト)が検討された。結果として、本研究におけるゴルフスイング他者観察能力テストは、平均点以下の難しいテストとなり、今後さらに検討が必要であると考察された。

C-11:ジュニアサッカー選手の最大地面反発発揮時におけるインステップキックの動作および膝関節の等速性伸展筋力とボールの初速度の関連について3次元動作分析を用いて検討された。研究結果より、ジュニアサッカー選手におけるキックによるボール初速度は、筋力の影響よりも、キック時のフォームや蹴り脚の運動連鎖の習熟度などキックにおける基礎的な部分がより影響しているのではないかと示唆された。

東海体育学会第64回大会のご案内

実行委員長 野村 良和(名古屋学院大学)

この度、第64回大会をお引き受けすることとなりました。

現在スポーツ庁あるいは文部科学省は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、国の威信をかけての対応に追われているようです。また一方では少子高齢化が加速度的に進み、生産年齢人口の減少が予測される中で、次代を背負う若手に必要な学力や実践力を策定すべく、学習指導要領の改訂作業も本格的になっています。

このような状況下で、国民の健康や体力の維持向上にとって、理にかなったスポーツ活動の実践、あるいはそれを支える研究の重要性は、益々高まっていると考えられます。その点からもスポーツ科学や健康科学の研究や教育に関係する者の責任の重さを改めて感じております。そこでこの学会大会が、いくらかでもそれらに貢献することができれば幸いです。

本来ですと、名古屋学院大学のスポーツ健康学部が所在します瀬戸キャンパスにお越しいただきたいところですが、会員皆様の交通の便を勘案いたしまして、熱田神宮に近い名古屋キャンパス白鳥学舎を会場として開催させていただくことといたしました。つきましては、多くの会員の皆様の研究成果のご発表並びに学会当日のご参加をお待ちいたしております。

東海体育学会第64回大会開催概要

- 【期 日】 平成28年10月30日(日) 受付:午前9時30分開始
- 【会 場】 名古屋学院大学 名古屋キャンパス白鳥学舎 希館
- 【参 加 資 格】 学会員はどなたでも事前申込及び参加費無しで参加できます。また、学会員でない方も当日受付で『当日参加会員』の手続きをおこない、参加費1000円をお支払い頂くことで、研究発表を含む全ての企画に参加することができます。
- また、シンポジウムは一般公開企画となりますので、どなたでも事前申し込み及び参加費なしで参加することができます。
- 【研究発表の申込と抄録提出の締切】 平成28年8月31日(水)
※学会ホームページの「学会大会申込用紙」をご利用ください。
- 【抄録提出締切】 平成27年8月31日(月)
学会ホームページ掲載の「一般研究発表申込書フォーマット」を利用してお申し込みいただくとともに、同掲載の「抄録フォーマット」を使用して抄録を作成して下さい。詳細は「演題募集要項」をご覧ください。

【内容】一般研究発表(口頭・ポスター)、シンポジウム、学会総会ほか

10月30日(日)	
9:30～	受付
10:00～12:00	口頭発表 2会場
12:00～13:00	昼食
12:00～13:00	理事会
13:10～13:50	総会(学会長挨拶 ほか)
14:00～16:00	シンポジウム 運動・スポーツ活動を通じたこどもの育み -地域・研究機関・学校等による協同的取り組みからの検証-
16:10～17:20	ポスター発表
17:20～	閉会の辞

※大会の日程は、一般研究発表の演題数などにより変更されることがあります。

【シンポジウム】

テーマ:運動・スポーツ活動を通した子どもの育み

-地域・研究機関・学校等による協同的取り組みからの検証-

概要:「子どもにとってスポーツ活動で育むべきものは何か」、体育・スポーツ活動に関連する地域と研究機関の協同的取り組みを踏まえて議論を深める。

シンポジスト:

○宮口和義 氏(石川県立大学 教授)

「ジュニアスポーツ選手のトレーニング指導」、「幼少年期に有効な運動指導」に関する研究に取り組む。共著書「幼児のからだところを育てる運動遊び(杏林書院)」等幼児の体力や運動能力に関する研究論文・著書多数有り。

○酒井俊郎 氏(中部大学 教授)

「子どもの身体組成と運動能力」に関する研究に取り組む。共著書「幼児のからだを測る・知る―測定の留意点と正しい評価法―(杏林書院)」、「保育内容(健康)(みらい)」等。前任校では付属の幼稚園の園長を歴任。

○伊藤嘉浩 氏(瀬戸市教育委員会 専門員兼指導主事)

教員経験のある方より、教育現場の現状および課題について発表。小学校、中学校現場で教員として活躍。教育委員会に着任後は、大学等と連携して子ども達の体力や健康問題の改善活動に共同で取り組んでいる。

【大会事務局】 東海体育学会 第64回大会事務局(事務局長 中野貴博)

〒480-1298 愛知県瀬戸市上品野町1350 名古屋学院大学スポーツ健康学部

学会ホームページ:<http://www.tspe.jp/index.html>

電話 0561-42-0351(内線3557) ファックス:0561-42-0629

電子メール taka@ngu.ac.jp

東海体育学会第64回大会演題募集要項

実行委員長 野村 良和(名古屋学院大学)

【発表申込】

- ・ 一般研究発表希望者は、東海体育学会ホームページ<http://www.tspe.jp>の「学会大会一般研究発表申込書フォーマット」をダウンロードし、必要事項を記入の上、大会事務局へ電子メールに添付して平成28年8月31日(水曜日)必着で申し込みください。

【発表資格】

- ・ 演者および共同研究者は、東海体育学会会員で平成28年度会費を納入した会員です。但し、本学会員以外の者を特別共同研究者として発表に加える必要のある時は、「特別共同研究者の登録」と「会費1,000円の支払い」が必要となりますので、申込期日までに学会事務局へ連絡の上、必要な手続きをしてください(※日本体育学会の他支部の会員は特別共同研究者扱いになります)。

【発表方法】

- ・ 口頭発表またはポスター発表。ただし、演題数と会場の関係から、発表方法、発表時間の変更を事務局からお願いする場合があります。

【発表時間】

- ・ 口頭発表:発表時間10分、質疑応答時間5分。
- ・ ポスター発表:発表時間3分。質疑応答は発表終了後の自由討論で行います。

【発表形式】

- ・ 口頭発表ではパソコンプロジェクターまたは資料によって行います。資料を用いる場合は、各自で100部程度を準備してください。VTR、OHP等などパソコン以外の機器をご利用になる場合は、「学会大会一般研究発表申込書フォーマット」の「口頭発表形式」欄に詳細を記入してください。
- ・ 口頭発表を行うためのパソコン環境として、OSはWindows 7、ソフトはPower point 2010、動画ソフトはWindows Media Player 13を準備いたします。文字化けを防ぐために、フォントはOS標準フォントをご使用ください。Windows以外のOS(例:Mac)をご利用される場合は、パソコンをご持参ください。
- ・ ポスターは、縦180cm、横90cm以内のサイズで作成し、大会事務局が用意したボードを使用して所定の時間帯に掲示してください。演題番号は事務局にて用意しますが、演題名、所属、演者名はご自身でご用意ください。押しピンは大会事務局で用意しますので、発表受付の際に受け取ってください。

【抄録作成】

- ・ 抄録の作成は、東海体育学会ホームページ <http://www.tspe.jp> に掲載されている「抄録フォーマット」を用いて、A4縦置き1ページ以内で作成してください。「抄録フォーマット」に記載された指示に適合しない抄録は原則として採択いたしません。
- ・ 作成した原稿は電子メールに添付し、下記の大会事務局へ平成28年8月31日(水曜日)必着で提出してください。

【その他】

東海体育学会学術奨励賞は、本大会において発表された一般研究発表の中から選考します。

【問い合わせおよび申込先】

東海体育学会第64回大会事務局(事務局長 中野貴博)

〒480-1298 愛知県瀬戸市上品野町1350 名古屋学院大学スポーツ健康学部

学会ホームページ:<http://www.tspe.jp/index.html>

電話 0561-42-0351(内線3557) ファックス:0561-42-0629

電子メール taka@ngu.ac.jp

庶務委員会からのお知らせ

庶務委員会 富岡 徹(名城大学)
鍋谷 照(静岡英和学院大学)
早川 健太郎(名古屋経営短期大学)

1.東海体育学会の役員

平成28年度の東海体育学会の役員一覧を以下の表に記載いたします。

2015年度の実行された選挙結果に基づき、当選者のご意向、退会のお申し出を受け追加当選された方を反映しております。また、平成28年度第1回理事会(平成28年2月20日)において会長推薦理事として坂井智明氏(名古屋学院大学:H28年学会大会当番校)、片山靖富氏(皇学館大学:H29年学会大会当番校)、渡邊航平氏(中京大学)が承認されました。また、監事として、齋藤由美氏(名古屋造形大学)、吉田文久氏(日本福祉大学)が、幹事として沖村多賀典氏(名古屋学院大学)推薦され、承認されました。

氏名	役職	所属
鶴原 清志	会長	三重大学
石垣 亨	理事長	愛知県立芸術大学
富岡 徹	庶務(長)	名城大学
鍋谷 照	庶務(副)	静岡英和学院大学
早川 健太郎	庶務	名古屋経営短期大学
田中 望	会計	東海学園大学
池上 久子	学会(長)	南山大学
小栗 和雄	学会(副)	岐阜聖徳学園大学
片山 靖富	学会	皇学館大学
片山 敬章	学会	名古屋大学
久保田 浩史	学会	岐阜大学
坂井 智明	学会	名古屋学院大学
水藤 弘吏	学会	愛知学院大学
溝口 紀子	企画(長)	静岡文化芸術大学
石田 直章	企画(副)	名古屋芸術大学
正 美智子	企画	名古屋学芸大学
來田 享子	企画	中京大学
山本 裕二	広報(長)	名古屋大学
富樫 健二	広報(副)	三重大学
篠田 知之	広報	岐阜経済大学
内藤 譲	広報	岐阜聖徳学園大学短期大学部
西田 保	編集(長)	愛知学院大学
筒井 清次郎	編集(副)	愛知教育大学
青山 健太	編集	愛知学院大学
岡野 昇	編集	三重大学
酒井 俊郎	編集	浜松学院大学
秦 真人	編集	愛知学泉短期大学
渡邊 航平	編集	中京大学
齋藤 由美	監事	名古屋造形大学
吉田 文久	監事	日本福祉大学
沖村 多賀典	幹事	名古屋学院大学

2.会員の消息

(会員数594名,平成28年5月10日現在)および顧問4名

※新入会員

赤田 信一 (静岡大学)
浅野 佑弥 (岐阜大学)
阿部 直紀 (愛知教育大学)
安藤 良介 (名古屋大学)
伊賀野 大 (静岡大学)
池田 磨美 (岐阜大学)
稲川 郁子 (常葉大学)
大矢 尚巨 (岐阜大学)
岡 将志 (岐阜大学)
片山 靖富 (皇學館大学)
金森 史枝 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)
可兒 勇樹 (愛知工業大学)
川端 公人 (静岡大学)
岸本 卓也 (岐阜大学)
黒岩 一雄 (常葉大学)
小泉 和也 (名城大学)
佐分 慎弥 (中京大学)
佐脇 匠 (愛知教育大学)
澤村 さやか(戸塚共立第1病院)
邵 健雄 (愛知県立大学人間発達学研究科)
鈴木 裕也 (岐阜大学)
巢立 隆宏 (東郷町施設サービス株式会社)
高崎 恭輔 (東海学園大学)
高山 伸也 (同朋大学)
張 禎 (愛知県立大学人間発達学研究科)
中尾 綾 (中京大学)
中野 弘幸 (安城市立安城中部小学校)
前田 幹夫 (三重大学)
松藤 貴秋 (中京大学)
向井 香瑛 (愛知教育大学)
村田 祐樹 (中京大学スポーツ科学部)
森田 重貴 (倉橋学園キラリ高等学校)
矢戸 幹也 (三重大学教育学部附属小学校)
山口 瑞生 (中京大学)
山田 浩平 (愛知教育大学)
吉村 真美 (中京大学)

※所属機関変更 (カッコ内は新所属)

田口 多恵 (信州大学)
都築 修平 (愛知県立杏和高等学校)

※転入会員

安藤 将宏 (静岡県立松崎高等学校)
和泉 憲昌 (防衛大学校体育学教育室)
稲葉 達也 (函南町適応指導教室)
衛藤 昂 (AGF鈴鹿(株))
大窄 貴史 (至学館大学)
小川 まどか(名古屋大学総合保健体育科学センター)

桂華 麻希 (藤田保健衛生大学)
 坂井 智明 (名古屋学院大学スポーツ健康学部)
 佐野 布由実 (静岡県富士市立田子浦中学校)
 清水 樂 (静岡県立池新田高等学校)
 杉山 卓也 (静岡大学)
 田中 憲子 (名古屋大学総合保健体育科学センター)
 中川 雅智 (東海学園大学)
 縄田 亮太 (愛知教育大学保健体育講座)
 新美 尚行 (東海学院大学短期大学部)
 平野 雅巳 (愛知淑徳大学健康医療科学部)
 藤田 紀昭 (日本福祉大学)
 本嶋 良恵 ((公財)岐阜県体育協会岐阜県スポーツ科学センター)
 山田 憲政 (中京大学)
 横山 慶子 (名古屋大学総合保健体育科学センター)
 四方田 健二 (名古屋学院大学)

※転出会員 (カッコ内は新所属)

石塚 創也 (公益財団法人日本体育協会)
 板谷 厚 (北海道教育大学旭川校)
 古瀬 由佳 (日本女子体育大学)
 齋藤 輝 (早稲田大学スポーツ科学学術院)
 佐藤 善人 (東京学芸大学)
 高嶋 香苗 (上越教育大学)
 高梨 泰彦 (中京大学スポーツ科学部)
 谷口 裕美子 (山梨学院大学)
 長谷川 弓子 (岩手大学人文社会科学部)
 本道 慎吾 (日本大学スポーツ科学部)
 三浦 哲都 (東京学芸大学)
 三輪 亜希子 (尚美学園大学芸術情報学部舞台表現学科)
 室伏 広治 (東京医科歯科大学)
 和所 泰史 (環太平洋大学)

※退会

康 冬玲 (中京大学)
 小島 正行 (セントラル接骨院)
 権田 瞳 (愛知県スポーツ会館)
 佐藤 裕子 (岐阜大学)
 都築 修平 (愛知県立杏和高校)
 鶴峯 治 (中京大学スポーツ科学部)
 豊嶋 久美子 (名古屋市立飯田小学校)
 中川 武夫 (中京大学スポーツ科学部)
 丹羽 丈司 (同朋大学)
 野々宮 徹 (名古屋柳城短期大学)
 藤墳 規明
 松岡 孝博 (至学館大学)
 三浦 修史 (南山大学)
 山中 市衛 (相山女学園大学)
 吉永 竜斗志 (中京大学)

※自然退会 (東海体育学会会則第7条による退会)

伊藤 照美
 今井 美希 (至学館大学健康科学研究所)
 宇土 泰希 (愛知教育大学大学院)
 加藤 彰浩 (青山学院大学)
 加藤 玲香 (愛知教育大学教育学研究科)
 新井田 侑加 (愛知教育大学大学院)

畑山 知子 (南山大学)
 東中 陽太郎 (中京大学大学院)
 平野 朋枝 (名古屋短期大学)
 藤本 彩夏 (愛知教育大学大学院)
 水谷 彰悟 (愛知教育大学大学院)

※住所不明

額 尔敦 (愛知県立大学)
 太田 恒義 (常葉学園大学)
 加古川 巳由紀 (豊田工業高等専門学校)
 佐宗 敬泰 (愛知教育大学)
 塩見 哲大 (中京大学体育研究所)
 柴田 優子 (名古屋大学総合保健体育科学センター)
 鈴木 健之 (愛知教育大学)
 鈴木 春智 (岐阜県スポーツ科学トレーニングセンター)
 高梨 泰彦 (中京大学スポーツ科学部)
 高邑 和樹 (湖西中学校)
 塚田 卓巳 (中京大学)
 坪井 和也 (中京大学)
 中塚 英弥 (NPO法人日本プロトレーナー協会)
 松本 みく
 宮尾 正彦 (トヨタ自動車株式会社)
 宮原 時彦
 森谷 友一朗 (株ヒマラヤ)
 山根 基 (愛知みずほ大学人間科学部)
 山脇 通弘

3. 日本体育学会・東海体育学会への登録・訂正等

日本体育学会会員の方は名簿に訂正箇所がありましたら、日本体育学会へ訂正依頼をお願いいたします。さらに、東海体育学会の方へもe-mail等を利用してお伝えください。なお、東海体育学会のみの会員の方は東海体育学会事務局までお知らせください。

4. 学会費の納入

日本体育学会の年会費は、日本体育学会へ振り込みをしてください。なお、自動振込みの申請用紙が必要な方は、日本体育学会のホームページよりダウンロードください。東海体育学会のみの会員の方は、東海体育学会の郵便振替口座に年会費3,500円を納入ください。

東海体育学会 郵便振替口座番号:00870-8-41336

5. e-Mailアドレス登録のお願い

活発な情報発信のため、今後登録頂いているメールアドレスへ情報提供していく予定であります。メールアドレスをご提出頂いていない会員の方は、下記事務局アドレスまでご連絡ください。

東海体育学会事務局住所
 〒468-8502 名古屋市天白区塩釜口1-501
 名城大学経営学部
 富岡 徹 研究室
 Tel 052-832-1151 (代表) 内線3443
 Fax 052-833-4767
 e-mail: office@tspe.jp

東海体育学会理事会議事録

平成27年度 第1回東海体育学会 理事会議事録

日時:平成27年2月21日(土)14時30分より

場所:名城大学 10号館 3階 第2大会議室

出席:藤井(会長)、鶴原(理事長)、伊藤、湯、富岡、鍋谷、西田、松田、溝口、山本、頼住(以上理事)、酒井、坪田(以上監事)

欠席:秋間、池上久子、池上康男、石田、種田、春日、斉藤、重松、正、館、富樫、中野、花井、平川、村瀬、吉田、寺田(以上理事)、伊藤(幹事)

理事会に先立ち、鶴原理事長より、出席理事数及び委任状提出数が理事会成立の定足数に達していることが確認され、理事会の開催が宣言された。

●会長挨拶

●平成26年度 第7回理事会議事録の確認

第7回理事会議事録案について確認がなされ、承認された。

【報告事項】

1.スポーツ健康科学研究VOL36の発刊について(編集委員会)

重松委員長欠席のため頼住理事より、資料に沿って以下の報告がなされた。

Vol35について発刊が終了し、掲載論文のPDFアップロードが完了した。Vol37について原稿募集中である。総説論文は中京大学 来田先生に依頼し、了承されている。原著論文1編査読中であり、継続中の論文なし。

鶴原理事長より、前回からの継続審議事項となっている査読者の報告掲載について、どの論文に対してどなたが査読したのかが分かってしまうのは避けたいとの意見があった。査読したことに対する業績対応は、査読の事実をメールなどで確認できるので、査読者名を出さず件数の従来の報告だけでよいのではと考えている。一方で、掲載論文についてはすでに査読が終わっているので掲載してもいいのではという考えもある。しかし、論文数が少ない場合は査読者の状況が分かりやすい。また、リジェクトなどがあった時に査読結果が漏れてしまいやすい。今までは査読者の名前はのせていない。次回継続的に審議して、意見を伺いたい。

2.その他

なし。

【審議事項】

1.理事会の年間予定(庶務委員会)

鶴原理事長より、一昨年、昨年と年間7回の日程で行っているの、従来通り、この形で行いたいとの言及があった。前回提案からの変更点として、次回(第2回)は4/11愛工大自由が丘キャンパスにて実施することとなった。また、第5回の9月の理事会開催については関連学会の開催日程を考慮し、また、学会大会抄録集発送の期限を確認して、9/26(土)に開催することとなった。

関連して、鶴原理事長より、以前は理事会で学会大会のプログラムを審議したりしていたが、学会大会委員会・当番校で確認の上、すぐに印刷できる体制をお願いしたい。また、各回については、開催時刻を原則14:30としているが、講演会・シンポジウムなど企画がある場合には、変更が有ると考えていただきたい。

西田広報委員長より、第3回に予定されていた「会報の内容の

決定」については、第2回4/11(土)に決定することに変更する提案がありました。鶴原理事長より、講演会の日程については、企画からの連絡があると思うが、7月と考えていただきたい旨発言があった。講演会の内容も同時日配送するため、4月の理事会で講演会の内容及び日時を決めていただき、会報と同時に案内できるよう要請があった。

2.日本体育学会名誉会員の推薦について(庶務委員会)

富岡庶務委員長より、名誉会員の推薦について提案があった。これまで本部の推薦のみだったが、平成24年から地域の推薦を受けられることになっている。そこで、本部からの推薦者2名(北川薫氏(中京大学)、村岡眞澄氏(名古屋学芸大学))を推薦することが確認された。加えて、本部の役員経験はなく推薦はなかったものの、対象者となる山本章氏(常葉大学)については次の事情から推薦することが提案された。東海体育学会の理事として複数回勤められたこと、静岡という遠方より当会の発展にご尽力頂いたこと、また、日本体育学会運動生理学分科会を母体とする運動生理学会での理事長とを務められたことなどを鑑み推薦することが提案された。審議のうえ承認されたが、鶴原理事長より、今後、推薦基準を考える必要があるのではないかとの意見があり、東海地域からの推薦基準として、理事を複数回の経験者ということと1つの目安として申し合わせとしたい旨提案され了承された。

推薦書の作成については、各先生方の所属機関を鑑み、北川氏:種田理事、村岡氏:正理事、山本章氏:酒井理事に依頼することが確認された。なお、担当者に推薦書作成自体が困難な場合は、各理事に窓口となって頂くなど、庶務、理事長、会長に一任することが了承された。

3.会報の内容

西田広報委員長より、会報の進捗状況について6月15日発送予定で編集を進めている旨報告があった。内容の詳細は省略するが、アイデアがあれば提案頂きたい旨要請があった。

4.その他

1)役員選挙について

富岡庶務委員長より、6月15日を予定している会報の発送に合わせ準備を進めたい旨発言があり、理事会審議について予定より1回早め、第3回理事会(5/16)の理事会で扱うことが提案され了承された。

2)幹事の交代について

鶴原理事長より、伊藤幹氏(名古屋学院大学)にお願いしていた幹事の職務について、本務校との関わりで辞退したいとの申し出があった旨報告され、提案通り了承された。会長からの委嘱となる新たな幹事として、早川健太郎氏(名古屋経営短大)(ご内諾)に委嘱する旨提案され原案通り了承された。

3)平成29年度の日本体育学会大会の会場について

酒井監事より、平成29年度の日本体育学会大会の当番校について、2014年12月の日本体育学会理事会で静岡大学が担当することが認められている旨紹介があった。また、6月の代議員会において最終決定されることが紹介された。静岡大学では現在30名ほどの実行委員会を立ち上げ、会場を東静岡駅近くのグランシップというイベント施設を使用して行うべく準備が進んでいることが紹介

された。藤井会長より、東海地域を代表して当番校となる静岡大学を中心とする実行委員会に対し、東海体育学会としてもできる限りのサポートをお願いしたいとの依頼があった。

次回理事会は、4月11日(土)の14:30愛知工業大学自由が丘キャンパス(名城大学より変更)にて行われる。

平成27年度 第2回東海体育学会 理事会議事録

日時:平成27年4月11日(土)14時30分より

場所:愛知工業大学自由が丘キャンパス1階会議室

出席:藤井(会長)、鶴原(理事長)、秋間、池上久、石田、春日、斎藤、重松、館、中野、鍋谷、西田、花井、村瀬、吉田、頼住、湯、寺田(以上理事)、酒井、坪田(以上監事)、早川(幹事)

欠席:池上康、種田、正、富樫、富岡、平川、松田、溝口、山本、伊藤(以上理事)

資料:次第、会報no88要旨、第63回大会ご案内(2枚)、第63回大会募集要項、編集委員会資料、日本体育学会庶務資料(5枚)

●会長挨拶

●理事長より、理事会定足数に達していることと、本日の資料の確認がなされた。また、早川先生(幹事)の紹介が行われた。

●平成27年度第1回理事会議事録の修正・確認

報告事項1.「スポーツ健康科学研究vol36の発刊について」のうち、本文中「vol35」を「vol36」に訂正いただきたい。

その他、特に修正なく、承認された。

【報告事項】

1.庶務委員会から報告

1)名誉会員の推薦について

常葉大学山本章先生の推薦書を日本体育学会にメール送信している旨の報告がなされた。

2)理事の所属変更

西田理事の所属が愛知学院大学に変更されている旨の報告がなされた。

2.スポーツ健康科学研究37巻発行について(編集委員会)

原著論文1(査読結果1回目を著者らに送付済み)、原著論文2(投稿論文1回目の査読依頼済み)、総説論文(9月末日までに投稿戴くことを確認済み)である。これらに加えて、奨励賞論文の2本が追加される予定であり、計5本の論文となる見込みである。

「時期的に論文の追加が間に合うか?」との質問に対して、4週間程度の査読期間であるため、年末まで受理できれば間に合うとの返答があった。

【審議事項】

1.会報について(広報委員会)

例年通り、6月15日までの完成を目指してすすめている。

研究情報の人選が未定であったが、研究交流委員会を通して、3名の先生を推薦してもらった。内藤正和先生(愛知学院大学:マネジメント分野)、中野貴博先生(名古屋学院大学:発育発達分野)、加納岳拓先生(三重大学:体育科教育分野)である。

また、国際情報の在外研修報告は、ペルーの報告を丸山真司先生(愛知県立大学)、ヨーロッパの報告を三浦哲都先生(名古屋大学)に依頼をした。その他は、前回の理事会にて報告済みである。

原稿は5月15日をメー切とし、昨年同様に依頼・回収を行う。この場を借りて、藤井会長、春日企画委員長、重松編集委員長、湯学会大会実行委員長、加えて、研究情報担当の中野先生への依頼をさせていただき了承を得た。その他、奨励賞などの原稿は広報委

員会の方で依頼・回収する。

2.東海体育学会第63回大会開催概要(案)について(学会大会委員会)

配布された開催要項について下記の修正が提案され、承認された。

・大会シンポジウムについてタイトルが決まったので「(仮題)」を削除する。

・案内のHPアドレスが南山大学のものになっているので修正する。

・シンポジウムのテーマの一部表記、「体育のレーゾンデートル」に「(存在価値)」を加える。

・フォントや頭出しなど体裁を整える。

・会場案内のマップにおいて、長久手キャンパスが学会会場であることがわかりにくいとの意見があったので工夫・修正する。

・大会のスケジュールを入れ込んだ方がいいとの意見があったため、作成し入れ込む。

また、湯理事からシンポジウムの意義についての説明が行われた。

3.東海体育学会第63回大会演題募集要項(案)について(学会大会委員会)

表記募集要項の広報について下記の件が提案、確認され承認された。

・演題募集要項は、会報及びHPに掲載する。

・案内と演題募集要項の連絡先が丸山先生と湯先生と、別々の表記になっているため、電話番号の表記は、丸山研究室に統一する。

・案内と演題募集要項における発信元の表記が異なるので、「実行委員長 愛知県立大学 湯 海鵬」と共通にする。

4.学会誌査読者の公表について(編集委員会)

雑誌に査読者の氏名を掲載するか否かについて継続審議となっている。その件について、編集委員会から、「査読者の氏名は載せない」旨の原案が出された。

その理由としては、次の点が挙げられた。査読者数が少ないため、誰がどの論文を査読したのかが分かってしまうこと。掲載不可を出した査読者の氏名も公表することになるため今後査読者にリジェクトの判定を困難にさせる可能性があること。著者と近い関係にある人物が査読者となった場合。査読の結果に影響を及ぼす可能性があり、査読を引き受けてくれなくなる恐れがあること。また、編集委員会とのやり取り次第で「査読した」根拠を示すことは可能であること。

議長を中心に、論点が次の2点に集約された。

1)学会誌に掲載するか?

2)理事会で氏名を提示するか?

査読料を払うようになってから理事会で扱うようになったとの経緯があるとの発言があった。また、査読者がわからない方が良いとの意見などもあった。結果的に原案通り、雑誌には掲載しないことが確認された。また、理事会においては、査読者の実名報告は不要とし、査読料が発生するため査読者が何名かについてのみ報告することが確認された。

謝金について、現金書留の経費及び手間がかかるため、現金からプリペイドカードなどに切り替えたいとの提案があった。これに対し、補償の面、会計処理の面などを勘案し、簡易書留でクオカードを送る手続きを了承し、領収書の返送を求めず、郵送の控えのみを残す形とすることが認められた。

5.その他

1)講演会の進捗状況について(広報委員会)

5月の理事会時に講演会の進捗状況について報告できるようにしておく。

2)日本体育学会本部より入会手続きの取扱い等について(庶務

委員会)

下記の件について、日本体育学会本部より意見聴取要請がありそれを受けて審議した。

(1)オンライン入会申込みシステムの導入について

WEBでの入会手続きを可能にする提案。特に、作業による人的ミスの防止と、自動引き落としと振込みによる会費納入情報の齟齬の防止のため。

(2)振り込みを選択している正会員年会費の本部事務局での取扱いについて

振り込みを選択している会員の本部、地域、専門領域の振り込みを本部が一括する旨の提案。特に、会員の振り込み費用の軽減と会員情報の一元化のため。

(3)平成27年度以降運用することが承認された事項の運用時期の一部見直しについて

平成26年度の承認された事項について、一部を平成28年度からの実施に変更する旨の提案。年度会費の徴収方法について、地域、専門領域における会費の引き落とし方法についての意見集約の期間、オンライン構築作業を停止することになりシステムの完成が遅れるため。

上記3点について、意見があれば4月中に個別に提案し、事務局で集約・検討の上、本部に返答させていただくことで了承された。

次回5月16日(土)14:30より名城大学にて行われる。

平成27年度 第3回東海体育学会 理事会議事録

日時:平成27年5月16日(土)14時30分より

場所:名城大学 天白キャンパス 10号館3階 第2大会議室

出席:藤井(会長)、鶴原(理事長)、秋間、池上久、石田、斎藤、正、館、富樫、富岡、中野、湯、山本、頼住(以上理事)、酒井、坪田(以上監事)、早川(幹事)

欠席:池上康、伊藤、春日、重松、種田、寺田、鍋谷、西田、花井、平川、松田、溝口、村瀬、吉田(以上理事)

資料:理事会次第、講演会開催のご案内、入会のしおり、会長及び理事選挙方法、役員選挙について、選挙に関わる日程等、郵送投票の案内、被選挙人名簿(9枚)、収支報告決算書、学術振興基金決算書、学会予算書(繰越金確定に伴う修正)

●会長挨拶

●平成27年度 第2回理事会議事録の修正・確認

特に修正なく、承認された。

【報告事項】

1.会報について(広報委員会)

富岡理事(庶務)から、会報に総会の議事録と理事会の議事録を掲載することが理事会で承認されていたが、入稿されていなかったため急遽、追加で行ったとの報告がされた。

2.講演会について(企画委員会)

講演会の内容の決定報告がなされた。

会場は名城大学天白キャンパス

日時は6月13日 15時から17時

講師は久米正一氏((株)名古屋グランパスエイト代表取締役社長)と瀬田元吾氏(フォルトゥナ・デュッセルドルフ日本デスク)

対象は一般・学会員で、予約は必要なく、終了後は懇親会を企画している。

案内は理事の先生方とHPにて掲載し、広めていく。また同日は東海体育学会理事会と日本体育学会社員総会・地域連絡会と重なっているため、日本体育学会の地域連絡会に地域を代表して石

田先生か池上先生にご出席いただくことで了承された。なお資料の瀬田氏の業務説明は削除し役職のみに変更することの報告がなされた。

3.入会手続きについて(庶務委員会)

日本体育学会への新入会手続きについて、地域を通さず直接本部ですべてできることに変更になったため、新入会者がいつ入会されたか地域ではわからないので本部へ確認が必要になることが報告された。あわせて、東海体育学会への入会は従来通りであることが確認された。

【審議事項】

1.次期役員選挙について(庶務委員会)

平成28-29年度の役員選挙について

I.選挙管理委員会の設置について

会則に倣い、各委員長と監事(2名)で構成することで承認された。以下のメンバーである。庶務(富岡)、学会(池上久)、企画(春日)、広報(西田)、編集(重松)、監事(酒井、坪田)。

II.被選挙人名簿作成について

被選挙者は5月13日現在、2期目の理事を除き578名だが3名は2か年日本体育学会年会費を支払っていないため資格失効となり計575名であるため、理事数は24名となることが承認された。被選挙人名簿については次回6月13日の理事会までに選挙管理委員会において確認することで承認された。

III.選挙日程について

下記の日程・内容で承認された。

5月中 名古屋天白郵便局に料金後納の申請を行う

6月中 選挙投票用紙の発送

7月31日 投票締切

8月中 ※開票

9月26日 理事会にて結果発表を行う

会員には学会大会プログラム集と一緒に郵送を行う。

※開票日は、選挙管理委員会と庶務で日程調整を行い、次の理事会で選挙管理委員会から報告すること。

IV.会長候補者得票数が同数の場合

会長の投票数が同数の場合は再投票のため、下記の日程内容で再確認された。

9月26日以降 学会大会プログラム集と一緒に投票用紙発送、

10月20日 投票締切

10月24日 学会大会開催日午前中に、開票、集計を行う

投票結果を理事会及び総会で報告

2.平成26年度会計報告(会計)

I.平成26年度収支決算報告がされた。

予算との大きな差額があるものについて報告された。

・刊行費/機関紙は大きな変更もなく予算よりも抑えることができた。

・設置委員会費/理事会は遠方の理事の方が多いため交通費がかさんだ。

監事の坪田先生から適正に監査したことが報告され、了承された。

印刷業者から、学会誌の次年度発送費の修正があるとの報告があり、加えて、郵送料の高騰が予想されていることが考えられ、対応を今後検討する必要があることが意見として出された。

II.平成26年度学術振興基金決算報告がされた。

会計担当中野理事から報告され、了承された。

3.平成27年度予算案の修正について(会計)

繰越金確定に伴う修正が報告された。

- ・支出について常置委員会費 編集委員会・企画委員会は26年度少なかったため減額
- ・今年度かかった常置委員会費 理事会を交通費がかかるため増額

以上の内容で承認された。

今回は、講演会の開催に伴い開始時刻が繰り上げられ6月13日(土)13時より名城大学にて行われる。

平成27年度 第4回東海体育学会 理事会議事録

日時:平成27年6月13日(土)13時05分より

場所:名城大学 天白キャンパス 10号館3階 第2大会議室
出席:藤井(会長)、鶴原(理事長)、伊藤、斎藤、重松、正、寺田、富岡、湯、鍋谷、西田、平川、溝口、吉田(以上理事)、早川(幹事)

欠席:秋間、池上久、池上康、石田、種田、春日、館、富樫、中野、花井、松田、村瀬、山本、頼住(以上理事)、酒井、坪田(以上監事)

資料:平成28-29年度会長および理事被選挙人名簿5枚、次第

●藤井会長あいさつ

●第3回理事会議事録は修正箇所なく承認された

【報告事項】

1.講演会について(企画委員会)

本日の講演会は、マネジメント関係の講演会は今までなかったため今回の企画となった。また本日講演会の後、懇親会を企画しているのでぜひ参加して頂きたいと報告があった。研究交流委員会を本日14時から行うとの紹介があった。

2.東海体育学会会報について(広報委員会)

会報は予定通り6月15日に発行予定(印刷は東明社)である。内容に関しては、理事会と総会の議事録も掲載のためページが増え、計43ページで製作との報告があった。また発送は、本日の理事会で審議後の「選挙人名簿」を同封し来週6月14日からの週で発送予定である。

3.学会大会について(学会大会委員会)

現在、広告掲載はスポーツシューズメーカー、モリタ、竹井機器の3社であり、さらに理事の方々に広告掲載業者の紹介のお願いがあった。シンポジウムは、演者は4名で決定しておりテーマは今回の理事会で報告予定であり、追加会場も交渉中の報告があった。

演題募集は、会報に掲載の演題募集要項で募集する。また学会ホームページにも演題募集要項を掲載するため、湯先生から山本先生へ報告することが確認された。

昨年の反省から、ポスター発表の座長が会場の運営することは難しく、担当者をおいていただきコントロールされると運営しやすいとの提案があり、演題数によって考えたいと当番校の湯理事から返答があった。

4.その他

特になし

【審議事項】

1.次期役員選挙について(庶務委員会)

会長及び理事被選挙人名簿について、理事会で審議し承認された。

また開票作業は8月19日(水)11時から名城大学で行うとの報告

があった。

2.その他

特になし

今回は9月26日(土)14:30から名城大学で行われる。

平成27年度 第5回東海体育学会 理事会議事録

日時:平成27年9月26日(土)14時30分から

場所:名城大学 天白キャンパス 10号館3階 第2会議室

出席:藤井(会長)、鶴原(理事長)、池上康、石田、斎藤、重松、正、寺田、富樫、富岡、湯、中野、鍋谷、村瀬、吉田(以上理事)、坪田(監事)、早川(幹事)

欠席:秋間、池上久、伊藤、種田、春日、館、西田、花井、平川、松田、溝口、山本、頼住(以上理事)、酒井(監事)

資料:次第、選挙結果1枚、会長理事の選出について1枚、学会大会プログラム原案、総会資料案、第2回地域連絡会議議事録2枚、編集委員会理事会資料1枚

●藤井会長あいさつ

●第4回理事会議事録は修正箇所なく承認された

【報告事項】

1.平成28—29年度役員選挙の結果について(選挙管理委員会)

名城大学天白キャンパスにて平成27年8月19日11時から開票作業が実施された。発送数は575通、投票数は105通であった(投票率18.26%)。会長候補者選挙の結果、鶴原先生が最高得票数であった。理事は県別の上位者(50音順)愛知県8名(池上久子氏、石垣享氏、種田行男氏、片山敬章氏、富岡徹氏、秦真人氏、山本裕二氏、来田享子氏)、三重2名(岡野昇氏、富樫健二氏)、岐阜2名(小栗和雄氏、久保田浩史氏)、静岡2名(酒井俊郎氏、溝口紀子氏)が選出された。残り10名は投票上位者(青山健太氏、桜井伸二氏、佐藤善人氏、篠田和之氏、正美智子氏、竹中嘉久氏、田中望氏、内藤譲氏、西田保氏、早川健太郎氏)であった(尚、同率は抽選を行った)。

また、新任の理事の方へは10月中旬に打診して承諾をいただくように連絡を行うこと、また学会大会プログラム集と一緒に「選挙結果」の発送を行うことが報告された。

2.委員会報告

編集委員会から、第5回編集委員会の報告がされた。7編の論文が投稿されており、内2編は受理、2編は再投稿を依頼、2編は査読中、1編は投稿待ちである。尚、学術奨励賞対象論文2編については、現在のところアクセプトされた段階になく、今年度の総会時表彰は不可能かもしれないことが報告された。

また庶務委員会から長年協賛等でご尽力いただいている(有)教育シューズ東海社長伊藤治彦様が5月にお亡くなりになり、東海体育学会から1万円のご仏前をご子息にお送りしたとの報告があった。

3.その他

特になし

【審議事項】

1.今年度の学会大会について(学会大会委員会)

まず、発表演題は例年並みの24題のエントリーがあったこと、協賛は「教育シューズ(展示あり)」「モリタスポーツ」「竹井機器株式会社」「丸丹スポーツ」の4社であることが報告された。続いて以下の内容について変更点の説明があった。学会大会の抄録集は

「プログラム」の名称で統一すること、未定であった口頭発表B会場の座長を愛知教育大学の合屋先生にお願いしたこと、口頭発表の間は5分で統一すること、駐車場の説明図を追加すること、懇親会の案内を追加すること、当日は会員か当日会員で一般無料参加はないこと、総会は会員のみ参加を周知させる、以上変更点について審議され全て了承された。

2.平成28年度予算案について(庶務委員会)

平成28年度予算案について中野先生から平成26年度をベースに作成し大きな変更はなく行いたいと説明があり、理事会で審議され承認された。

3.総会資料について(庶務委員会)

例年のものを踏襲して作成予定であることが説明され、次年度64回大会は名古屋学院大学で開催される予定であるが、日程は未定であるため大会までに決まれば記入することで確認された。また学会大会の総会における司会者と議長団(当番大学1名、発表者から1名)について、司会者、議長を当番校から1名選出して頂くことを湯先生にお願いし、発表者からの議長の選出は会長、理事長に一任され、両者には当日理事会に参加していただくことが確認された。さらに次第には「学術奨励賞の表彰」の有無を問わず記載は行うことで承認された。

4.学会における学術奨励賞選考委員会について(編集委員会)

内規に従い、編集委員会から5名と企画委員長推薦の館先生の6名で行うことが審議され承認された。

5.学会誌掲載論文のカラー印刷について(編集委員会)

現在投稿されている論文投稿者から、学術雑誌掲載の図をカラー印刷にしたいとの申し出があった。投稿規定にある「特別な印刷」にカラー印刷が相当するかの審議が行われ、白黒印刷で行うことを基本とし「特別な印刷」に当たるかは編集委員会最終判断・決定していくことで確認された。

6.地域連絡会議について(庶務委員会)

8月27日に行われた地域連絡会議の議事録にある内容について11月半ばまでに意見を集約したいとの意向があることが報告された。内容については、特に地域組織の在り方についてであるが、現状において社団法人となった本部と独立学会である地域学会に強制的に入るのは法的に問題があり、地域学会入会を義務付けない方向で検討がなされているとのことであった。理事会としては、独立学会である東海体育学会は今後、会員獲得と合わせ運営費についてなど対応を検討しなければならず、従来通りの活動を行いたい旨を表明していくことで確認された。

7.その他

特になし

次回は10月24日(土)12:10～愛知県立大学で行われ学会大会時に行う。

平成27年度 第6回東海体育学会 理事会議事録

日時:平成27年10月24日(土)12時から

場所:愛知県立大学 長久手キャンパス

出席:藤井会長、鶴原理事長、池上久、石田、斎藤、重松、正、館、富樫、富岡、中野、鍋谷、西田、花井、平川、村瀬、山本、吉田、頼住、湯、寺田(以上理事)、酒井、坪田(以上監事)、早川(幹事)

欠席:池上康 種田 春日 松田 溝口 伊藤(以上理事)

資料:次第、編集委員会から、学会委員会から、地域組織に対するアンケート

●会長あいさつ

●第5回理事会議事録について確認され、出席者に寺田氏を追加して承認された。

【報告事項】

1.総会議長団について(庶務委員会)

総会議長団について、理事長より当番校から伊藤先生 理事会から小栗先生にお願いし了承を得たことが報告された。

2.研究セミナーについて(企画委員会)

12月5日「研究のアップデート」を行うこと、また藤井会長に総括も含めたお話を行っていたことが報告された。さらにチラシは本日配布することが報告された。

3.学会誌投稿状況について(編集委員会)

査読の進捗状況は先回理事会に報告した内容と変わらないことが報告された。学術奨励賞選考委員は資料とおりである。また前理事会で話し合われたカラー印刷は、今回の論文は特に必要ではないと委員会で判断し、著者に伝え再投稿待ちであることが報告された。

4.第7回理事会の開催時刻変更(庶務委員会)

12月5日、研究アップデート実施に伴い、次回理事会を14時から、新旧理事引き継ぎ会を15:30から行うことが報告された。また2名辞退者が出ていることが報告された。

5.新旧理事会引き継ぎ会提出物について(庶務委員会)

各委員会の委員長は、現在進んでいる提案・懸案事項等を書類でまとめ、次回引き継ぎ会で提出していただきたい旨、依頼があった。

6.その他(学会委員会)

第63回大会の参加人数は、12時の時点で会員62名、当日会員33名、顧問3名であることが報告された。また平成29年度の当番校は三重県であることが報告された。

会報原稿依頼について「東海体育学会報告」は池上先生、「第63回大会を終えて」を湯先生、「第63回見聞録」はそれぞれの座長の先生にお願いすることで了承を得、各原稿は12月18日までにメールにて池上先生に提出することが報告された。

【審議事項】

1.第64回大会について(学会大会委員会)

名古屋学院大学 白鳥キャンパスで平成28年10月30日(日)に行う提案がされ、承認された。また名古屋学院の学部長である野村先生より総会で挨拶をしていただくことで了承された。

2.日本体育学会 地域組織の在り方について

12月中に本部に意見を提出するに当たり、藤井会長から補足説明が行われ意見として「改正案」等、審議されたが、本日以降、不明な点等を富岡理事まで意見として出していただくことで了承を得た。

3.その他

新理事に選出された桜井伸二氏、種田行男氏から、桜井氏は、本務校業務及び他団体業務が重なり理事会に出席できないため、種田氏は、本務校業務(副学長)業務により理事会に出席できないためとの理由により辞退の申し出があり審議され、了承された。またこれに伴い水藤氏、鍋谷氏が繰り上げて新理事になった

め、2名の会員にはお知らせすることで承認された。

次回 12月5日(土)14時から名城大学で行われる。

平成27年度 第7回東海体育学会 理事会議事録

日時:平成27年12月 5日(土)14時から

場所:名城大学 天白キャンパス 10号館3階 第2大会議室

出席:藤井会長、鶴原理事長、秋間、石田、春日、斎藤、重松、館、富岡、中野、鍋谷、平川、村瀬、山本(以上理事)、酒井、坪田(以上監事)、早川(幹事)

欠席:池上久、池上康、種田、正、富樫、西田、花井、松田、溝口、吉田、頼住、湯、伊藤、寺田(以上理事)

資料:次第、学会大会委員会業務引き継ぎ事項と報告4枚、編集委員会資料9枚、庶務引き継ぎ資料1枚

●会長あいさつ

●第5回理事会議事録の修正(新理事氏名の追記)・第6回理事会議事録について確認が行われ、承認された。

●平成27年度総会議事録についての確認が行われ、承認された。

【報告事項】

1.東海体育学会第63回大会報告(学会大会委員会)

学会大会(第63回)は136名の参加者、口頭発表13演題、ポスター発表11演題であったこと、学会大会の会計が報告された。

2.理事会候補者の就任辞退と繰り上げ当選について(庶務委員会)

佐藤善人先生、竹中嘉久先生から辞退の申し出があった。これに伴い、繰り上げで筒井清次郎先生、石田直章先生が繰り上げ当選となり、ご本人の承諾を得ることができた旨、報告された。

3.スポーツ健康科学研究(Vol.36)の進捗状況について(編集委員会)

査読の進捗状況について、8編の論文について受理4件、査読中2件、投稿待ち1件、リジェクト1件であること、査読者へのお礼を会計から渡して頂くことの2点について報告された。

4.来年度の理事会への送り送り事項・懸念事項について(各委員会)

・庶務委員会から、交通費について1,000円以上は1,000円を差し引いた額を支給すること、学会の入会手続きは本部に直接行い、入会金1,000円は地域に入金されること、地域の在り方については、まだ本部から決定事項として来ていない状況が報告された。

・編集委員会から、投稿論文について現状に依じて進んでいるものについては現委員会が行い、今後は新メンバーに引き継ぐ旨、報告された。

・学会大会委員会から学会大会の開催方式が9月理事会で承認を得たこと、64回大会は名古屋学院大学で平成28年10月30日に行われること、学会大会運営の課題として演題数に応じての会場設定、大会の周知徹底、日程の工夫が必要である旨報告された。また学会大会の予算に関する検討課題として、会計報告についての扱いと講師謝金等の扱いをどうするかが挙げられた。

・企画委員会からセミナー、特別講演会は、企画から実施までの期間が短く、周知させる時間がないため、効果的に行える方法を今後、考える必要がある旨、報告があった。

5.その他

特になし

【審議事項】

1.次年度学会担当理事について(学会大会委員会)

次年度学会大会担当校である中野先生から学会大会理事の選出は、未定であることが報告された。今後、学会大会理事の任期は検討事項とすることが報告された。

2.来年度理事会開催日、場所および審議事項について(庶務委員会)

次年度の理事会日程について全7回の日程が審議され、経費、実施回数の問題があり、次回、新年度理事会に申し送りとなった。

3.学術奨励賞の選考について(学術奨励賞選考委員会)

学術奨励賞の選考について6名で審査を行った結果、小椋優作先生(岐阜大学大学院)「幼児期の運動遊び時に発する言葉の質的・量的違いと運動能力との関連」、川崎未貴先生(岐阜大学大学院)「幼児期における体力向上量の程度が児童期後期の体力特性に及ぼす影響—3歳児から12歳児までの縦断的データに基づいて—」が受賞候補者として推薦された。理事会で審議された結果、承認された。

4.投稿規定の改正について(編集委員会)

投稿規定の改正について、I和文規定について12.「原則として」13.「ることを原則とし」の削除、12.(例1)の文中のスペースの統一、14.「再提出の際には、審査委員ごとに「修正対応表(回答コメント)」を作成する。その際、ページ数や行番号などを用い、個々の指摘に対して修正・対応箇所を明示する」の追加、14の追加に伴う以降の番号変更、II欧文規定の14.の追加、14.追記に伴うそれ以降の番号変更、また投稿の手引きについて6.1)にえる「3~5個」の追記、7.「本文および文献表には、ページ下部中央に通し番号をつける。また、審査員が要修正事項や照会事項を指摘しやすく、また著者が修正対応表(回答コメント)で修正・対応箇所を明示するために、本文および文献表の左側に行番号(ページごとに振り直し)を付加すること」の追記、13.「謝辞を含む」の追加15.「『体育学研究』あるいは『JSHS』投稿の手引き」を追加、審査規定について5.「おいて」に修正が審議され、承認されじかいの「スポーツ健康科学研究」より掲載することで決定した。また審査規定2.「投稿された論文の質が低い場合は、審査せず却下することがある」の追記の審議がされたが、却下され2.「審査は、編集委員会から委嘱された…」を「審査は、編集委員会及び編集委員会から委嘱された…」に変更することで承認された。

5.その他

特になし

次回 新年度理事会は平成28年2月20日(土)14時から名城大学で行われる。

平成28年度 第1回東海体育学会 理事会議事録

日時:平成28年2月22日(土) 14:30~17:00

場所:名城大学 10号館 3階 第2大会議室

出席:鶴原会長、青山、池上、石垣、小栗、久保田、篠田、正、田中、筒井、富岡、内藤、鍋谷、秦、早川、溝口、山本、来田、坂井、片山(靖)、渡邊(以上理事)、斎藤、吉田(以上監事)

欠席:石田、岡野、片山(敬)、酒井、水藤、富樫、西田(以上理事)、沖村(幹事)

資料:次第、名簿、名誉会員の推薦について(5枚)、理事会日程について、組織の在り方について

●会長あいさつ

鶴原会長から、開会のあいさつが行われた。

また平成27年第7回理事会議事録について、前理事会より承認を得ていることが報告された。

【報告事項】

1.平成28年度からの理事の確認について

各理事から自己紹介が行われた。

2.スポーツ健康科学Vol.37の発刊について

前事務局である富岡理事から、昨年12月に発送済みであることが報告された。

3.その他

特になし

【審議事項】

1.理事長選出について

鶴原会長より、欠席理事については全員、委任状が出されていることが告げられた。そして出席理事17名による投票が行われた。開票作業は鶴原会長・富岡理事が行い、開票の結果、石垣理事11票、山本理事3票、酒井理事1票、富樫理事1票、秦理事1票であり、石垣理事が理事長として選出・承認された。

2.会長推薦理事について

鶴原会長より会長推薦理事として名古屋学院大学の坂井智明先生（H28年学会当番校）、皇学館大学の片山靖富先生（H29年学会当番校）、中京大学の渡邊航平先生が推薦され審議の結果、承認され、委嘱された。

3.監事と幹事の委嘱について

鶴原会長より監事として名古屋造形大学の齋藤由美先生、日本福祉大学の吉田文久先生に、また幹事として名古屋学院大学の沖村多賀典先生に委嘱された。これに引き続き会長推薦理事および監事が新たに参加し、新理事・新監事の自己紹介が行われた。

4.学会事務局について

鶴原会長より学会事務局について、昨年に引き続き名城大学経営学部 富岡研究室にお願いしたい旨提案があり審議の結果、承認された。

5.理事の役割分担について

鶴原会長より、理事会の役割分担について庶務委員会、学会委員会、企画委員会、広報委員会、編集委員会について各委員会の業務内容の概要が紹介された。各委員会役割分担について審議され、下記のように提案された。

庶務委員会

- 富岡理事、○鍋谷理事、田中理事（会計委員会）、早川理事
- 学会大会委員会
- 池上理事、○小栗理事、片山靖理事、片山敬理事、久保田理事、坂井理事、水藤理事
- 企画委員会
- 溝口理事、○石田理事、正理事、来田理事
- 広報委員会
- 山本理事、○富樫理事、篠田理事、内藤理事（HP担当）
- 編集委員会
- 西田理事、○筒井理事、青山理事、岡野理事、酒井理事、秦理事、渡邊理事
- （●委員長、○副委員長）

欠席理事には庶務委員会から連絡することで承認され、所属委員会、また、各委員で互選された委員長、副委員長長について、

本人の意思確認を経て決定することが付議された。

6.理事会の年間予定（庶務委員会）

富岡理事から平成27年理事会を参考に全7回で理事会の日程が提案された。山本理事から会報の内容の決定が第2回、第3回で記載されており、第2回までに会報の内容の決定を行いたいとの提案があり審議の結果、承認された。また会長、理事長、各理事の日程を確認し全7回の日程、議題は下記の日程で承認された。

回	日程	議題
第1回	2月20日	理事会日程・役割分掌
第2回	4月16日	会報の内容・講演会の内容および日時の決定
第3回	5月14日	会報に同封する学会大会の概要の決定
第4回	7月 2日	学会大会プログラム詳細の決定・講演会開催
第5回	9月17日	学会大会発表者・総会議長・総会内容
第6回	10月30日	学会大会・総会（名古屋学院大学 白鳥校舎）
第7回	12月10日	学術奨励賞候補確認・セミナー開催

尚、第2回理事会までに広報委員会が行う会報の執筆者等内容についての審議は、3月中旬に広報委員会から審議事項として庶務委員会に提出し、庶務委員会が会長・理事長へ審議依頼を提案し、理事長が各理事へメール審議として行うことが審議され、承認された。

吉田監事から、これまでの企画委員会による講演会およびセミナーは、参加者の増員のために理事会と同日に行ってきた事が紹介された。あわせて溝口広報委員長からも多くの参加者を期待することが述べられたことから、本年度も講演会およびセミナーは理事会と同日に実施することが確認された。さらに、講演会の案内は会報に同封されることから、会報の発行を講演会の約1ヶ月前となる5月末日までに行うことが望ましいということが確認された。

また鶴原会長から、学会大会や講演会、セミナー案内等動員につなげるため、会員のメール等情報を集められるように庶務委員会、広報委員会で検討してほしい旨、要請された。

7.日本体育学会名誉会員の推薦について（庶務委員会）

富岡理事から、日本体育学会名誉会員について前理事会から承認を得ているが、東海地域における対象の方は4名であることが説明された。東海体育学会の理事、監事をされた愛知工業大学石垣尚男先生・鈴鹿大学市野清二先生を東海体育学会として推薦したい旨提案され、追認された。尚、石垣先生については愛知工業大学藤井勝紀先生により、市野清二先生については愛知産業大学篠瀬歩先生に推薦書作成をお願いし、本部へ提出することで了承を得た。他の2名に関しては、規定に従い東海地域からは推薦しないことが審議の結果、決定した。

8.その他

富岡理事から地域組織の在り方として、昨年理事会で紹介された内容を新理事の方に報告した。さらに本部常務理事である来田理事から参考に現状の日本体育学会の考え方について紹介がなされた。

鶴原会長からメール審議においては、返信期日を設けることとし、期日を過ぎて返信された場合、また返信がない場合は異議なしとする旨が提案され、承認された。

事務局から連絡として、メーリングリストが使用可能なこと、交通費は、往復1000円以上は申請をしてほしいこと、欠席の場合はリダイレクトでお願いしたい連絡があった。

今回は、平成28年4月16日 名城大学で行われる予定である。
以上

【総会報告】

平成27年度東海体育学会総会議事録

日時 平成27年10月24日(土) 13時から

場所 愛知県立大学 長久手キャンパス

資料 式次第

司会 愛知県立大学 丸山先生

愛知県立大学 神山副学長からご挨拶があり、続いて東海体育学会藤井会長挨拶があった。

次に議長団選出にて、立候補者がいないため岐阜聖徳大学 小栗和男先生、岐阜経済大学 伊藤嘉人先生が承認された。

【議事】

【報告事項】

1. 平成26年度事業及び決算報告について、鶴原理事長から報告がされた。
2. 平成26年度学術振興基金決算書について鶴原理事長から報告があり、坪田幹事から監査報告がなされた。
3. 平成26年度収支決算報告について鶴原理事長から報告され、坪田幹事から監査報告がなされた。
4. 平成27年度事業における中間報告が鶴原理事長から報告がなされた。

【審議事項】

1. 平成28年度の事業計画案について鶴原理事長から提案され、承認された。
2. 平成27年度繰越金確定に伴う予算修正案について、鶴原理事長から提案され承認された。
3. 平成28年度の予算案が鶴原理事長から提案され、承認された。
4. 第64回大会について名古屋学院大学 白鳥学舎10月30日(日)実施案が鶴原理事長から提案され、承認された。これに続いて名古屋学院大学 野村良和スポーツ健康学部長からご挨拶があった。
5. 学術奨励賞の表彰について鶴原理事長から報告があり、ただ今審議中のため表彰は無いとのことであった。

以上

【会則】

東海体育学会会則

1. 総 則

第1条 この会は、東海体育学会と称する。

第2条 この会は、日本体育学会東海地域を兼ねる。

第3条 この会は、体育に関するあらゆる科学的研究をなし、体育学の発展を図り体育の実践に寄与することを目的とする。

第4条 この会には、専門分科会を置くことができる。

2. 会 員

第5条 この会は、正会員のほか、学生会員を置くことができる。

(1) 正会員は第3条の目的に賛同し、正会員の推薦および理事会の承認を得て、規定の会費を納入した者とする。

(2) 学生会員は、大学の学部学生およびそれに準ずる者で正会員の推薦および理事会の承認を得て、規定の会費を納入した者とする。

第6条 会員はこの会の機関紙、その他研究情報に関する刊行物等の配付を受けることができる。また所定の手続きを経てこの会の行うあらゆる事業に参加することができる。但し、学生会員は学会大会で発表することはできない。

第7条 会員で2カ年間で会費を納入しない者は退会したものとみなす。

3. 組織および運営

第8条 この会の会務ならびに事業を運営するために、次の役員をおく。

(1) 会 長 1名

(2) 理 事 会員の25分の1名

(3) 監 事 2名

2 会長推薦理事を若干名置くことができる。

第9条 会長はこの会を代表し、会務を総括する。

2 理事は理事会を構成し、この会の事業執行の責任を負い、会務を処理する。

3 監事はこの会の財務、業務等の会務を監査する。

4 顧問はこの会の運営に関し必要に応じて助言を行う。

第10条 役員の任期は、郵送での選挙後の1月1日より、その翌年の12月31日までの2年間とし、(同一職では)2期の重任を限度とする。

第11条 会長は正会員の中から選挙により、正会員の投票で決定する。

第12条 理事は正会員の中から選挙によって、正会員の投票で決定する。

2 会長推薦理事は理事会の議を経て会長が委嘱する。

3 理事に欠員が生じた場合は、これを補充することができる。

第13条 監事は正会員の中から会長が委嘱する。

第14条 この会には顧問を置くことができる。顧問は東海体育学会の会長、日本体育学会の会長・副会長等の役員経験者の正会員の中から理事会の推薦により、総会での承認を得て決定する。

第15条 会務を補佐するため、会長の指名により、幹事若干名を委嘱することができる。

第16条 この会の運営は、次の機関による。

(1) 総会

(2) 理事会

第17条 通常総会は毎年1回学会大会の際に開き、出席した正会員を以て構成する。総会は役員の提出する重要事項を議決する。総会は会長がこれを招集する。

第18条 会長および理事会が必要と認めた場合、または正会員の要求があつて理事会が適当と認めた場合には、臨時総会を開くことがある。

第19条 総会の議事は出席者の過半数を以て決する。

第20条 理事会は、選挙によって選出された理事の互選により理事長を選出する。理事長は理事会を招集し、その議長となる。

第21条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会をおく。
庶務、会計、企画、広報、学会大会、編集

第22条 理事会は理事の過半数の出席によって成立し、議事は出席者の過半数を以って決する。ただし、予め書面（署名捺印）を以って当該議事に対する意向を表示した者を出席者とみなす。

4. 事業

第23条 この会の目的を達するため、次の事業を行う。

- (1) 学会大会の開催
- (2) 研究会、講演会の開催
- (3) スポーツ健康科学研究の刊行
- (4) 会報の発行
- (5) その他この会の目的に資する諸事業

第24条 学会大会は毎年1回以上開き、研究成果の発表を行う。

第25条 この会の事業を推進するため、地域的な会を設けることができる。

5. 会計

第26条 この会の経費は、次の収入によって支弁する。

- (1) 会員の会費
- (2) その他の収入

第27条 会員の会費は次の通りとする。

- (1) 正会員 年度額 3,500 円
- (2) 学生会員 年度額 1,500 円

第28条 この会の会計年度は1月1日より12月31日までの1年間とする。

6. 役員選挙

第29条 役員選挙を円滑ならしめるため、選挙管理委員会を組織する。選挙管理委員は理事会各委員会のなかから選出された理事各1名および監事とする。

第30条 会長の選挙は、正会員の書面による単記無記名投票により行い、得票最上位者を選出する。ただし、最上位者の得票数が同数の場合、再度正会員の書面による無記名投票により決選投票を行い、得票最上位者を選出する。なお、決選投票で得票数が同数の場合、抽選により決定する。

第31条 理事の選挙は、正会員の書面による5名連記無記名投票により、愛知県の得票数上位8名と愛知県を除く各県別に得票数上位2名の計14名の理事を選出し、残りの理事を得票上位者から選出する。ただし、末位のもの得票数が同数の場合には、抽選により決定する。

7. 会則改正

第32条 この会の会則は、総会出席者の3分の2以上の賛成により改正することができる。

附 則

この会の事務局は、理事会の議を経て決定する。

日本体育学会関連役員等については別途定める。

改正	昭和45年2月1日	改正	平成7年11月19日
改正	昭和51年2月1日	改正	平成9年11月9日
改正	昭和52年12月4日	改正	平成12年11月18日
改正	昭和55年12月7日	改正	平成17年10月30日
改正	昭和57年12月5日	改正	平成22年10月31日
改正	昭和61年10月5日	改正	平成24年10月27日
改正	昭和62年11月28日	改正	平成25年11月3日
改正	昭和63年11月27日	改正	平成26年10月25日
改正	平成5年9月26日		

編集後記

東海体育学会会報第89号を会員の皆様にお届けします。この会報の編集作業中に、熊本地震が発生し、今もなお毎日のように地震が続いています。被災された方々のことを思うと、この会報がお手元に届くころには、地震が収まっていることを願うばかりです。

さて、東海体育学会の役員が改選され、鶴原清志会長(三重大学)、石垣享理事長(愛知県立芸術大学)のもと各種委員会の活動が始まりました。広報委員会でも、会員相互のコミュニケーションの活性化のために、様々な情報を提供していきたいと考えております。

本号では、鶴原清志会長に巻頭言をご執筆いただき、様々な社会情勢の正しい現状認識のもと、本学会のさらなる発展の方向を探る決意が述べられております。

また、研究情報として、田内健二先生(中京大学)には、2012年のロンドンオリンピックでの経験をもとに、やり投げのコーチングにおける貴重な実践報告をしていただきました。研究と実践とのギャップを埋め、相補的な関係を気づくために、科学的データに精通した選手・コーチの育成が重要であるをご指摘いただいています。堀田典生先生(中部大学)には、コンドロイチン硫酸が運動時の過度な血圧応答を抑制する可能性に関する最新の研究成果をご報告いただいています。さらに内田良先生(名古屋大学)には、組体操などで問題になっている学校管

広報委員長 山本 裕二(名古屋大学)

理下の重大事故に関して、特に頭部外傷についてエビデンスをもとに解説していただきました。内田先生には、7月2日に名城大学で開催される東海体育学会講演会にもご登壇いただき、スポーツ事故についてご講演いただく予定です。会員の方の多くの参加をお待ちしています。

さらに、各大学の情報として、愛知大学の地域政策学部の中にある「健康・スポーツコース」の紹介を湯川治敏先生に、南山大学の体育教育について金興烈先生にご寄稿いただきました。

その他、昨年度、愛知県立大学で開催されました第63回大会の報告と、今年度10月30日に、名古屋学院大学・名古屋キャンパス白鳥学舎で開催される東海体育学会第64回大会のご案内と演題募集要項を掲載しています。演題募集締め切りは、8月31日ですので、奮ってご参加いただきますようお願いいたします。

そして、昨年度の各委員会の報告と庶務委員会からのお知らせ、理事会・総会の議事録も掲載しています。特に住所不明会員をご存知の方や、メールアドレスの登録をされていない方は、office@tspe.jpまでお知らせいただけると幸いです。

最後になりましたが、貴重な玉稿をいただきました先生方にお礼申し上げます。ありがとうございました。

東海体育学会会報 No. 89

発行日	2016年5月31日	発行	東海体育学会	編集	広報委員会
事務局	〒468-8502 名古屋市天白区塩釜口1-501 名城大学経営学部 富岡研究室				
	TEL/052-832-1151(代表)(内線3443) FAX/052-833-4767				
E-mail	office@tspe.jp				
ホームページ	http://www.tspe.jp/				
